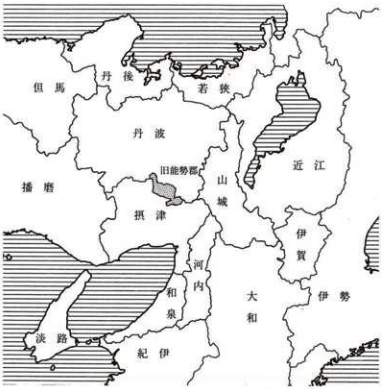
倉垣遺跡・長谷のガマ等発掘調査概要

農村総合整備事業「歌垣第２地区」等に伴う調査・Ⅳ

― 豊能郡能勢町所在 ―



旧能勢郡（現豊能郡）位置

2000・3

大阪府教育委員会

はしがき

豊能郡能勢町は大阪府の北端に位置し、町境の北側を京都府、南側を兵庫県とに接しています。摂津・丹波の山々に取り囲まれ、大阪府でも数少ない自然が多く残されている高原の町です。しかも歴史と文化にも恵まれ、文化財が町内各地に残る地域でもあります。しかし、この能勢町も近年の圃場整備事業、宅地、ゴルフ場などの開発により、その姿は大きく変貌しようとしています。

大阪府教育委員会では町内各地で広範に進められている圃場整備工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を、昭和59年度より継続して実施し、その間に多くの資料が蓄積されてきました。その成果はこれまでの概要報告書等で公開し、活用を図ってきた次第であります。

今回報告する倉垣・坪ノ内・戸石遺跡は、これまでと同様に圃場整備工事に先立つ発掘調査であります。その内容としては、弥生時代の集落と墓域、古墳時代の集落跡で、まとまった遺構と遺物が発見されました。また併せて実施した長谷のガマは、中世にさかのぼる可能性のある水利施設で、全国的に例を見ない独特なものです。これらの文化財の調査成果は、地域の歴史を解明する上で貴重な資料となることと確信しております。

調査に際しては多くの方々のご協力をいただいたことに厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財行政に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成12年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　小　林　　栄

例　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府環境農林水産部より依頼を受けて、文化財保護課が担当実施した府営農村総合整備事業「歌垣第２地区」等に伴う発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、文化財保護課技師辻本武を担当者として、長谷のガマでは平成10年２月から、倉垣遺跡では平成10年６月および翌11年11月から、坪ノ内・戸石遺跡では平成11年７月から現地調査を実施し、それに伴う整理作業を並行して進め、平成12年３月に終了した。

3．調査にあたっては、地権者各位および地元土地改良区、大阪府農と緑の総合事務所池田分室、能勢町教育委員会をはじめ多くの諸機関、諸氏より懇切なご協力を賜った。記して感謝する次第である。

4．本書の執筆・編集は、辻本が行った。

本文目次

はしがき
例　言

目　次
第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　位置と環境 …… 1
　　能勢の主要な遺跡一覧表 …… 3
第２章　倉垣遺跡の調査
　第１節　概要 …… 4
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　Ｈ区の調査 …… 7
　第４節　Ｉ区の調査 …… 13
　第５節　Ｊ区の調査 …… 25
　第６節　Ｈ～Ｊ区出土の弥生時代石器と縄文式土器 …… 34
　第７節　Ｌ区の調査 …… 36
　第８節　Ｍ区の調査 …… 39
　第９節　Ｎ・Ｏ・Ｐ区の調査 …… 43
第10節　今回の調査のまとめ …… 43
　倉垣遺跡本書報告分の各調査区の主要遺構一覧表 …… 45
第３章　坪ノ内・戸石遺跡の調査
　第１節　坪ノ内遺跡の調査 …… 48
　第２節　戸石遺跡の調査 …… 49
第４章　これまでの調査のまとめ …… 51
　倉垣地区主要遺構時期別一覧表 …… 52
　山内地区主要遺構時期別一覧表 …… 53
　吉野地区主要遺構時期別一覧表 …… 54
第５章　ガマの調査
　第１節　ガマの概要 …… 55
　第２節　ガマの調査 …… 58
報告書抄録 …… 64

図版目次

図版扉　歌垣第２地区空中写真（1967年撮影）
図版一　H区全景
図版二　II区空中写真と大溝105
図版三　H区各遺構と遺物出土状況
図版四　Ⅰ・J区空中写真
図版五　Ⅰ区全景
図版六　Ⅰ区南半部と各遺構
図版七　Ⅰ区各竪穴式住居
図版八　Ⅰ区各遺構
図版九　J区全景と竪穴式住居等
図版一〇　J区各遺構
図版一一　J区方形周溝墓と竪穴式住居
図版一二　L区・M区空中写真
図版一三　L区・M区全景
図版一四　L・M区の各遺構
図版一五　倉垣・坪ノ内・戸石遺跡
図版一六　H～J区出土縄文・弥生時代遺物
図版一七　H～J区出土弥生時代遺物（1）
図版一八　H～J区出土弥生時代遺物（2）
図版一九　Ⅰ・J区出土石器
図版二〇　II区大溝105出土遺物（1）
図版二一　H区大溝105出土遺物（2）
図版二二　Ⅰ区竪穴式住居３出土遺物（1）
図版二三　Ⅰ区竪穴式住居３出土遺物（2）
図版二四　Ⅰ区竪穴式住居３出土遺物（3）
図版二五　J区P－35出土遺物
図版二六　H～J区出土須恵器
図版二七　II～J区出土製塩土器・古代中世遺物
図版二八　M・L・O区出土遺物
図版二九　M・L区および坪ノ内遺跡出土遺物
図版三〇　長谷の棚田の空中写真
図版三一　棚田の風景写真
図版三二　長谷のガマの調査（1）
図版三三　長谷のガマの調査（2）
図版三四　長谷のガマの調査（3）
図版三五　長谷のガマの調査と石敷道路

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

大阪府教育委員会は、能勢町内で施行される圃場整備事業に伴い、1984年度から遺跡の発掘調査を実施してきた。それは、圃場整備予定地に試掘調査を行なって遺跡の有無および範囲を確認し、その範囲はできる限り盛土によって保存をはかり、切土あるいは用排水路設置によってやむを得ず地下の遺跡に影響を与える場合は、その部分に限って発掘調査を行なうというものである。

このような考えに基づき、能勢町においては十数年にわたり継続して発掘調査を実施し、数多くの貴重な成果をあげてきた。1998・99年度においても、町の北東部に位置する歌垣第2地区内の倉垣遺跡に圃場整備工事が予定されたため、大阪府環境農林水産部と協議のうえ、遺物包含層および遺構が削平される部分について発掘調査を行なった。

また能勢町の南西部に位置する長谷地区おいて、農道建設が予定された。当地区は大阪近郊では珍しく棚田の発達している所で、美しい景観を呈している。この棚田には「ガマ」と称される特殊な水利施設の存在が以前より知られていた。これは起源が中世に遡る可能性のあるもので、本府教育委員会では「ガマ分布地」として文化財分布図と地名表に記載している。予定される農道はほとんどが盛土によるもので、ガマを破壊するものではない。しかし建設されてしまうと半永久的に見られなくなるものなので、環境農林水産部と協議した結果、農道予定地にかかる6ケ所のガマを調査することとなった。調査は1998年2月からと同年5月から、それぞれほぼ1ヶ月間にわたって実施した。

第2節　位置と環境

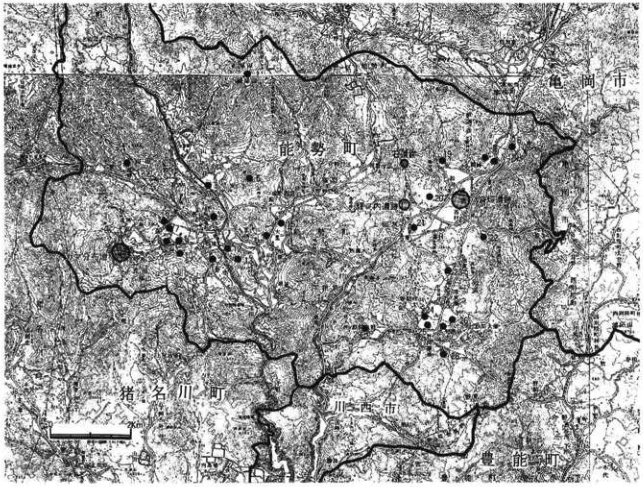
能勢町は大阪湾より直線距離で30km離れた山中にある町で、標高200～250mの盆地が点在している。倉垣は当町の北東にあって南北1.5km、東西1kmの盆地である。この盆地の西端に沿って田尻川が南流する。現在の集落は盆地平野と周囲の山塊との接点というべき位置に展開するが、今回調査した倉垣遺跡は盆地の中央にあり、集落とは離れている。

盆地平野内には条里制が広く明瞭に認められるが、倉垣遺跡周辺は盆地中央にもかかわらず条里が乱れており、むしろ条里制が及ばないと言ってよい。条里のないところに原始・古代の遺跡が存在し、逆に条里の明瞭な所では人間の生活した痕跡が薄くなるという特徴は、能勢町内では他に岐尼、久佐々、東郷、山内の各地区で認められるところである。

一方のガマのある長谷は、能勢町の南西端の最奥部にあたる地域である。能勢から川西・伊丹方面へ行く道は、古くはこの長谷の東部を通り、三草山の西麓の才ノ神峠を越えるものであった。この峠には能勢最古の道標が今なお立っており、町の文化財の指定を受けている。長谷はかつては交通の要所であったのである。この地区は南に三草山、東に龍王山を背負い、山田川の支流である長谷川が東流する。平野は長谷川に沿ってわずかにあるだけで、水田のほとんどは山腹に造

成されており、美しい棚田景観を見せている。ガマはこの棚田に伴う横穴式の水路で、中世にまで遡るものとされている。農業関係の貴重な遺跡であるが、そのほとんどは今なお十分に機能を果たしている。

能勢町内には数多くの遺跡があり、またここ二十年ほどにわたる調査によって、その内容がかなり明かとなっている。その詳細は、これまでに発行されている『能勢町史』や各発掘調査報告書等に記載されているので、それらを参照することをお願いして、ここでは主要な遺跡をピックアップして、その一覧表を呈示するにとどめたい。なお倉垣遺跡とガマについては重要な遺跡であるが、本書で報告しているので、この表から除外している。



第1図　能勢の主要な遺跡

能勢の主要な遺跡

番号	遺跡名	時期	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
1	月峯寺跡	中世	山岳寺院	伽藍跡	石造美術品が散在	府指定史跡
2	月野窯跡	8世紀前葉	窯跡	焚口と煙出し	須恵器	能勢唯一の古代窯跡
3	中筋遺跡	縄文時代	集落		縄文時代前期を中心に多量に出土	
4	森上城跡	戦国時代	城跡	土塁、郭、堀割		
5	山辺城跡	戦国時代	城跡	土塁、郭、堀割、虎口		西能勢では最大規模
6	尾道遺跡	奈良～平安時代	官衙跡	掘立柱建物群、井戸	墨書「厨」、緑釉、帯金具、製塩土器	製塩土器の出土量は一万点以上
7	屋敷遺跡	平安時代	集落	掘立柱建物群、井戸	墨書「田中西」、灰釉、黒色土器	
8	上杤遺跡	古墳時代	集落	竪穴式住居	布留式土器	
		飛鳥～平安時代	官衙跡	掘立柱建物群	帯金具、土馬、銅椀	
9	城ケ脇遺跡	飛鳥～奈良時代	集落	竪穴式住居	銅椀	
		中世	集落	掘立柱建物群	滑石製石鍋	
10	岩坪古墳	古墳時代後期	古墳	横穴式石室	耳環、玉、鉄製武器	1951年調査、能勢最初の発掘調査
11	法楽坂遺跡	9世紀	集落	掘立柱建物群	銅印「當氏之印」	銅印は府指定文化財
12	狐塚古墳	古墳時代後期	古墳	前方後円墳	須恵器人物	能勢唯一の前方後円墳
13	塩山古墳群	古墳時代中～後期	古墳	方墳と円墳	埴輪	7号墳には葺石
14	大里廃寺跡	7世紀	寺跡		軒丸・軒平瓦	能勢唯一の古瓦出土地
15	大里遺跡	弥生時代	墳墓	方形周溝墓群	鹿の絵の壺	
		奈良～平安時代	官衙跡	掘立柱建物群	墨書「西殿」、墓石、緑釉	能勢郡衙有力推定地
16	吉野遺跡	14世紀		掘立柱建物群	甕に入った大量埋蔵銭	発掘調査による発見
17	吉野古墳群	古墳時代中期	古墳	円墳、割竹型木棺	鉄刀	鉄刀は町指定文化財
18	原田遺跡	弥生時代中～後期	墳墓	方形周溝墓	底部穿孔の弥生式土器	墓壙内から完形の磨製石剣
19	小戸古墳群	古墳～飛鳥時代	古墳	横穴式石室		
20	大呉谷古墳群	古墳時代後期	古墳	横穴式石室	鉄鏃、玉	能勢最大の後期群集墳
21	円山古墳群	古墳～飛鳥時代	古墳	横穴式石室	鉄鏃、玉、馬具	
22	地黄北山遺跡	縄文時代	集落		押型文	
		弥生時代中～後期	集落	竪穴式住居	櫛描波状文	
23	丸山城跡	中世	城跡	土塁、郭、堀割		能勢氏の居城
24	巻場遺跡	13世紀	居館跡	掘立柱建物群、井戸、塀	完形の瓦器椀	長町庄関係の方形居館
25	野間遺跡	古墳～飛鳥時代	集落	竈付きの竪穴式住居群	竈の支脚が良好に残存	
		奈良～平安時代	官衙跡	掘立柱建物群	墨書「乙麻呂」、製塩土器	
		14～15世紀	居館跡	掘立柱建物群、堀	絵画模様の陶器、「澄」銘のある陶器皿	長町庄の居館、中世最大の掘立柱
26	九ノ坪遺跡	10～11世紀	集落	土壙	墨書「出雲」	
27	野間中古墳群	古墳～飛鳥時代	古墳	横穴式石室	銀鈴、鉄鋌、馬具、玉、耳環、太刀柄頭柄頭	鉄鋌は町指定、環頭は東京国立博物館所蔵
28	野間氏屋敷跡	中世末	居館跡	土塁、郭、堀割、庭園		
29	岩崎神経塚跡	12世紀	経塚		養和元年銘の経筒、和鏡、常滑焼の大甕	東京国立博物館所蔵

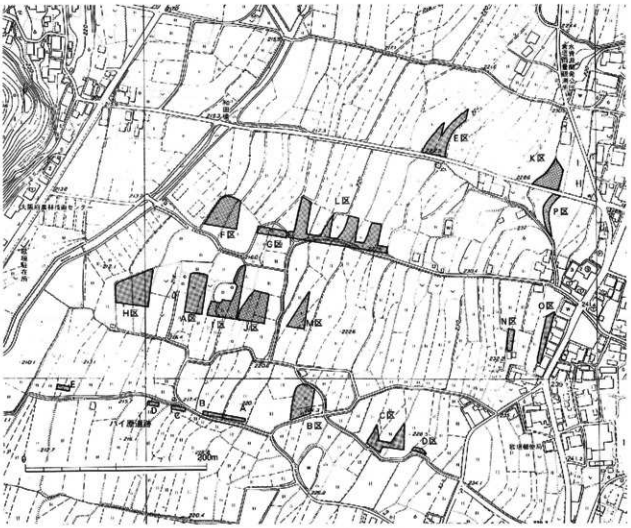
第２章　倉垣遺跡の調査

第１節　概要

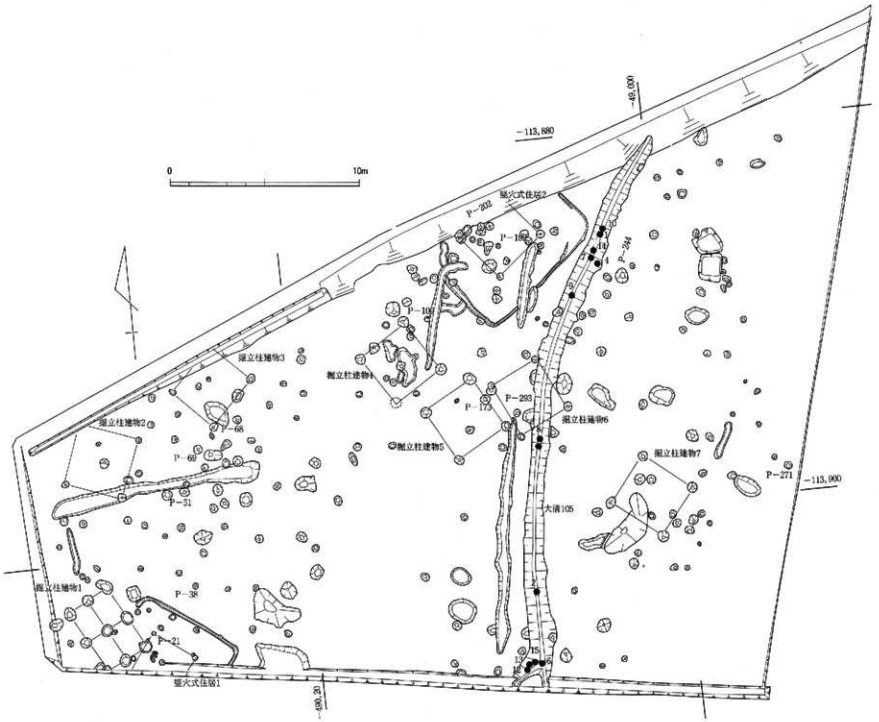
倉垣遺跡は、当初1995年度の試掘調査によって「ハイ原遺跡」として発見されたもので、翌96年度に当遺跡の発掘調査とともに周辺の試掘調査を実施したところ、遺跡の範囲が拡大することが判明した。ハイ原という小字名から名付けた遺跡名では適切ではなくなったので、地区名から「倉垣遺跡」と名付けたものである。従ってハイ原遺跡は倉垣遺跡に含まれることになった。

さらに97年度にＡ～Ｅ区、98年度にＦ～Ｋ区、99年度にＬ～Ｐ区の発掘調査を実施した。

以上の調査の成果は、ハイ原遺跡については『歌垣第2地区遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』(1997)、Ａ～Ｄ区については『倉垣遺跡発掘調査概要』(1998)、Ｅ～Ｇ・Ｋ区については『倉垣遺跡（Ｅ区等）発掘調査概要』(1999) の報告書として、本府教育委員会より公刊されている。



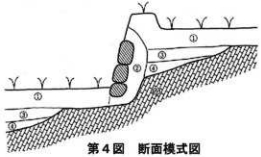
第２図　倉垣遺跡調査区位置図


0
10m
-113,880
-49,000
-113,900
-49,020
竪穴式住居2
竪穴式住居1
掘立柱建物1
掘立柱建物2
掘立柱建物3
掘立柱建物4
掘立柱建物5
掘立柱建物6
掘立柱建物7
P-202
P-244
P-293
P-173
P-68
P-69
P-51
P-38
P-21
P-271
大清105

第3図　H区全体図

第２節　基本層序

倉垣遺跡における層序は単純で、①現耕土（表土）、②石垣の裏込め土、③遺物包含層上層、④同下層、⑤地山となる。なお①の耕土の下層には茶色粘質土のいわゆる床土が形成されることが多い。



第４図　断面模式図

遺物包含層は黒褐色土であるが、Ｉ区西端部、Ｊ区西端部では上下二層に分かれる。両層は同種の質、色調を呈するが、上層は下層よりやや明るく灰色がかっているという微妙な違いがあるとともに、中世の遺物を含むことがある。上層は中世の以降の水田造成の際に前世の遺跡を削平してもってきた盛土層、下層はプライマリーな遺物包含層と言えよう。

遺物包含層を除去すると地山面となり、遺構が明瞭に見え出す。しかし、Ｈ・Ｉ・Ｊ区の東端部の地山は現水田造成の際に削平されており、いわゆる表土下即地山となる。

第３節　Ｈ区の調査

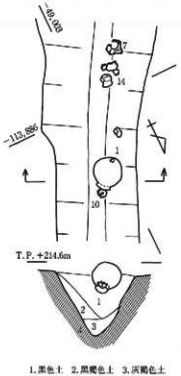
大溝105

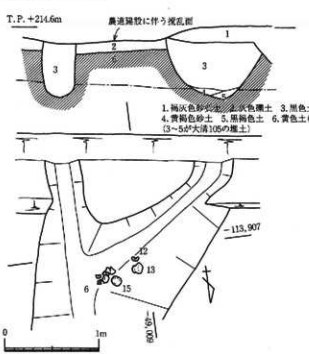
調査区の東半部を西にやや膨らむν弧を描いて南北に走る溝である。検出長は30mであるが、南端で二又に分かれて調査区外へ延びる。

幅1.0～1.2m、深さ0.7～0.8mを測る。溝底の高さは北端で標高213.8m、南端で213.9mで、ほとんど水平の溝である。しかし、調査区全体の元来の自然地形は、南東から北西へゆるやかに下がるものなので、この溝は南から北への流れとなるはずである。

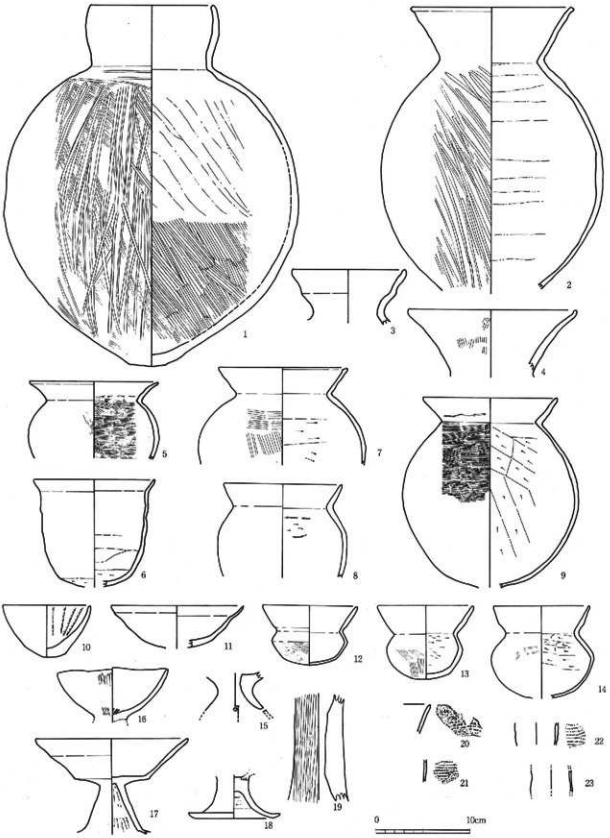
埋土はほとんど黒色土で、部分的に溝底に黄褐色土や灰褐色土が見られるが、水が流れた痕跡は観察されなかった。

この溝からの出土遺物はかなり多くてまとまっており、一括遺物として貴重なものである。





第５図　大溝105内の土器の出土状況と断面図



第６図　大溝105出土遺物

大溝105出土遺物

(1) は完形の壺で、口縁部が内湾して立ち上がり、胴部はほぼ球形でその下半部がやや尖り気味となり、底部は平底の痕跡を示す。胴部外面には縦方向のミガキ、口縁部はナデを施す。胴部には大きな黒斑を有する。この壺は溝内の上部に口縁を下にして埋められていた。壺のレベルは、最近の耕作土の直下にあり、偶然にも耕耘機等による破壊をまぬかれ、割れることなく全くの完形で残存したものである。(10) も完形で (1) の口縁部に接して出土しており、蓋として使用された可能性がある。

(2～4) の壺は、口縁部がまっすぐに伸びるもの (2)、二重口縁の痕跡を持つもの (3)、やや外反する口縁端で上部に少し折れ曲るもの (4) がある。

(5～9) は甕。(9) が典型的な庄内系で、外面に細かいタタキ、内面にヘラケズリを施し、頸部内面の稜線が明瞭である。(7) の口縁端部は内に肥厚しており、布留系のものとなる。(6) は他と形状が異なるが、一応甕に分類した。

(10、11) は鉢。(10) は内面にヘラの当たった痕跡が連続しており、文様化している。(11) は口縁部に段を有する。

小型丸底壺 (12～14) は、口縁部が胴部に比べて大きく開くもの (12、13) と、それほど開かないもの (14) がある。

(15) は有孔の小型器台。

高坏 (16～19) では、碗形高坏 (16) と、坏部が平底から屈曲して開くもの (17) がある。

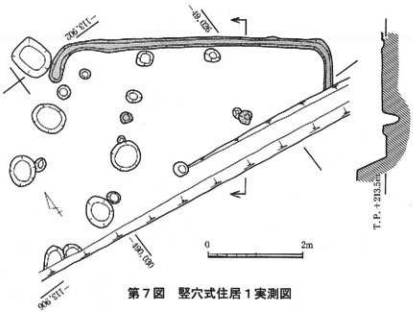
(20～23) は製塩土器。外面にタタキを持つものであるが、細片なので形状の復元は難しい。内陸部で出土する製塩土器として、注目されるものである。

竪穴式住居1

調査区の南西端で検出した。住居の南半分は調査区外である。一辺5.5mの方形で、幅0.15m、深さ0.1mの壁溝が回る。壁溝は住居の西辺では途切れてしまうが、これは後述の掘立柱建物1に切られたためであろう。

壁溝から1.3m離れて、2.5m間隔に二つの柱穴を検出した。本来は4本柱の住居であろうが、残りの柱穴は調査区外にある。柱穴の大きさは径0.3m程度、深さ0.4mである。

この住居に伴う確実な遺物は出土しなかった。周辺の包含層から6世紀の須恵器片

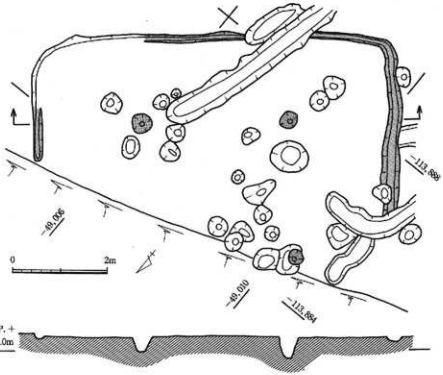


第7図　竪穴式住居1実測図

が出土しているので、この時期のものと考えたい。

竪穴式住居2

調査区の北東部で検出した。住居の3分の1は水田に伴う擁壁のため、大きく削られている。規模は一辺7.5mの方形で、幅0.15～0.3m、深さ0.1mの壁溝が周る。壁溝から東西方向で1.9m、南北方向で1.5m離れた位置に、3m間隔で三つの柱穴を検出した。4本柱の住居となるが、残りの1本は前述のように削られている。柱穴は径0.3m前後、深さ0.3～0.5mである。この住居は後世の溝やピットによって攪乱されているが、柱穴はこれらに比べて深さのあるもので、容易に区別できた。

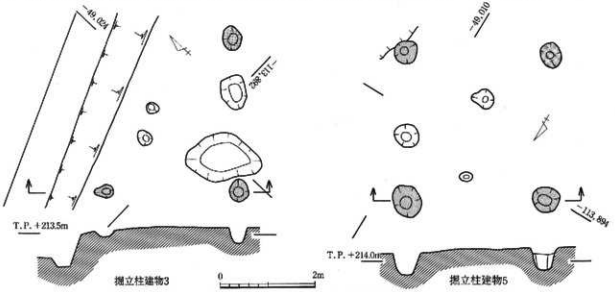


第8図　竪穴式住居2実測図

この住居に伴う確実な遺物はないが、近くから6世紀の須恵器片が出土するので、この時期のものとしたい。

掘立柱建物2～7

本調査区では全体で200以上の小ピット遺構を検出した。この小ピットのうち、比較的深いもの（深さ0.25m以上）を抽出してみると、4本が3m間隔に方形に並ぶものを多く発見することが



第9図　掘立柱建物3・5実測図

できた。1間×1間の掘立柱建物の柱穴と考えた。

このような建物は全部で6棟で、すべて重なり合うことはなく、また前述の竪穴式住居跡とも重ならない。柱穴は径0.3～0.4m、深さ0.3～0.5mで、一部には断面に柱痕が観察された。

これらの建物群は掘立柱建物と考えたが、それでよいのかどうか。柱間寸法が3mで、竪穴式住居2の柱間寸法と変わらないところから、掘立柱建物というよりも4本柱の竪穴式住居で、壁や壁溝が削平されて柱穴のみが残存したものと考えることは可能である。しかし確証できないので、今は従来通りに掘立柱建物としておく。

これらの建物群の時期については、柱穴からの出土遺物が非常に少なく決め難い。しかし前述のように竪穴式住居とも重ならないという点から、竪穴式住居の時期と同じと考えたい。

掘立柱建物1

調査区の南西隅で検出した。東西2間（2.5m）×南北2間（3.7m）の規模で、方向はN－30°－Wを測る。柱穴は径0.6～0.7m、深さ0.3～0.4mで、柱痕は見当たらなかった。

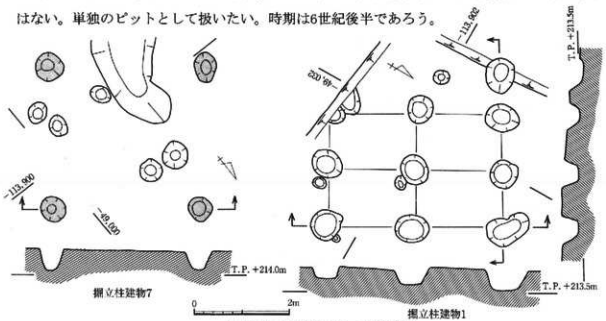
この建物は竪穴式住居1と重なる。しかしこの建物の部分で住居の壁溝が途切れるので、前者が後者を削平してつくられたものと考えられよう。

出土遺物としては、柱穴の一つのP－21から土師器の口縁部（32）が出土している。これは古墳時代のものであるが、建物がこの時期を示すものと即断はできない。近くで中世の瓦器片が出土しており、また後述の掘立柱建物13と規模や柱穴のあり方がよく似ているので、一応中世のものとしておきたい。

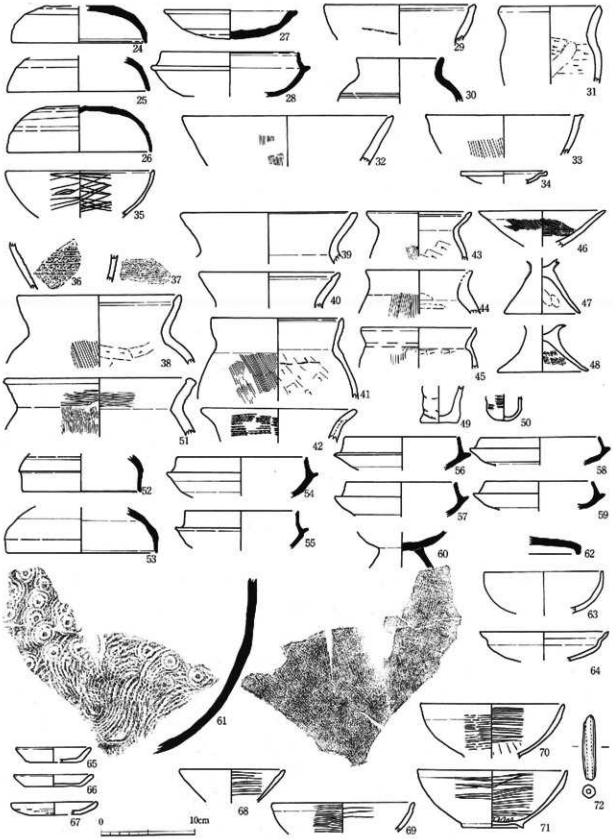
P－69

掘立柱建物3の南西に1.5m離れて所在するピットで、中に須恵器坏（27）が出土した。坏はその立ち上がりを意図的にきれいに打ち欠いたものである。

ピットは径0.5m、深さ0.35mを測る。このピットに組み合うものはなく、従って建物の柱穴ではない。単独のピットとして扱いたい。時期は6世紀後半であろう。



第10図　堀立柱建物7・10実測図



第11図　H区出土遺物（24～35）は各遺構から、（36～72）は包含層から出土

P－244

大溝105より東に1m離れた位置にある小ピットである。径0.6mで、深さは0.1mと浅いものだが、拳大の石が1数個入れてあった。

組み合うピットはなく、単独のものである。出土遺物がなく、時期は不明。近年の可能性もある。

H区出土遺物

H区では前述の大溝105を除き、遺構に伴って出土する遺物は少ない。

(24～26) は須恵器坏蓋で、それぞれP－51、271、293から出土した。須恵器坏 (27) は前述したように立ち上がり部分を意図的に打ち欠いている。(28) は掘立柱建物4の柱穴の一つP－109から出土しており、建物の時期を示すものといえよう。

(29、30) はP－173から出土した布留式の土師器甕と須恵器壺で、時期の違うものである。(31～33) はそれぞれP－202、21、192から出土した土師器である。以上は古墳時代である。

(34) は平安時代のいわゆる「て の字」状口縁の土師器小皿でP－38、(35) は口縁端部内面に沈線をもつ瓦器碗でP－68から出土した。

以上は遺構から出土した遺物で、以下 (36～72) は包含層から出土した遺物である。

(36、37) は弥生式土器片。(36) はヘラ描きによる直線文と円形文を施す。円形文の方は一見竹管文のように見えるが、ヘラによるものである。(37) は2本を単位とする櫛描き。

(38～45) は布留式の土師器甕。(46～48) は土師器高坏で、布留系であろう。(49) は外面にタタキ目を残すミニチュア土器。(50) は製塩土器である。以上の (38～50) は、大溝105に伴っていた可能性のある遺物である。

(52～59) は古墳時代の須恵器の坏蓋および坏身。(60) は須恵器の高坏。(61) は焼きの甘い須恵器の甕の腹部片。外面に格子タタキ、内面には同心円状の当て具痕が明瞭に残る。

(51) は奈良あるいは平安時代に下る可能性のある土師器甕。(62) は須恵器坏蓋の端部。(63、64) は土師器碗。

土師器小皿 (65～67)、瓦器碗 (68～71) は中世である。

(72) の土錘は時期が分からないものである。

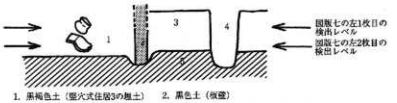
第4節　I区の調査

I区はH区より東へ70m離れて設定した調査区である。その間には97年度に調査したA区がある。A区では主に古墳時代末～飛鳥時代の竪穴式住居や掘立柱建物を検出している。竪穴式住居は作り付けの竈を持ち、支脚が立ったまま出土している。

I区は逆L字状を呈する調査区であるが、弥生時代から中世に至るまでの各時代の遺構・遺物が検出された。

竪穴式住居3

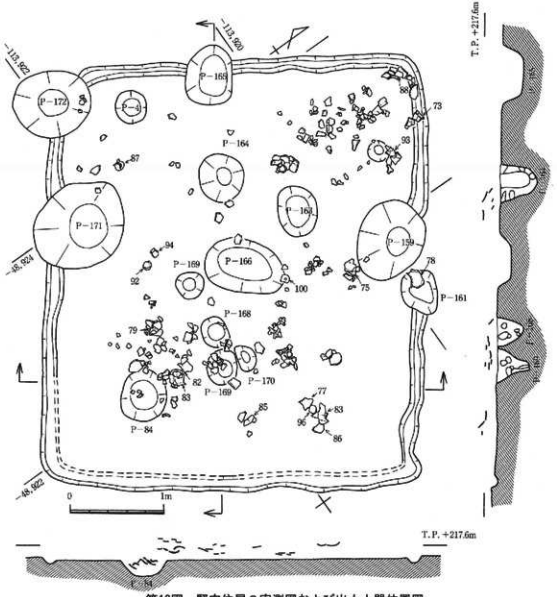
調査区の南西部で検出した。4.0×4.5mの方形で、方向は国土座標から45°振れている。住居内には幅0.15m、深さ0.1mの壁溝が周る。



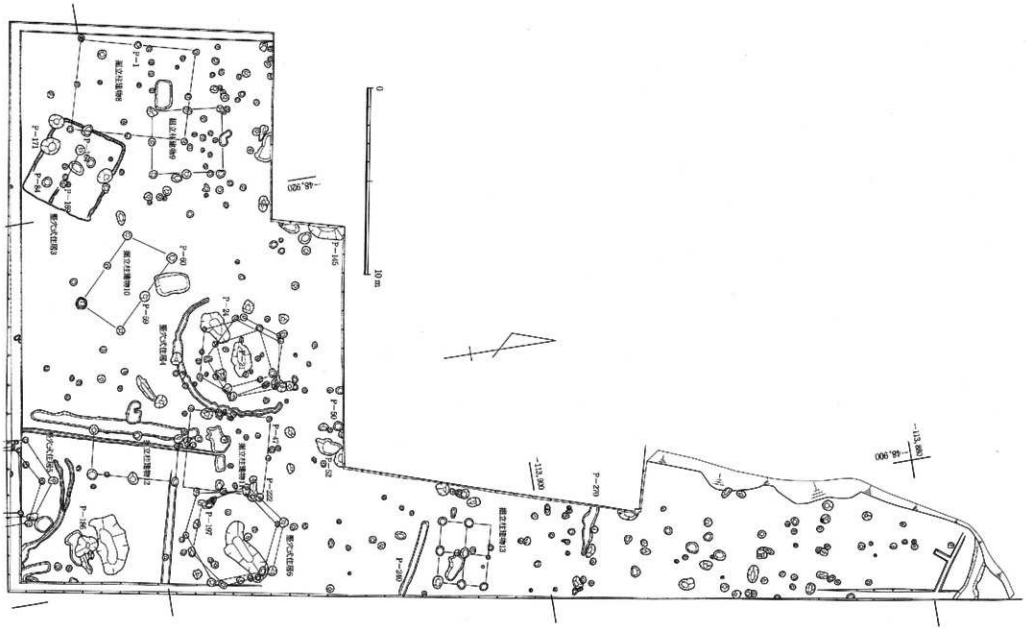
第12図　竪穴式住居３の壁部分の断面模式図

住居の柱穴はＰ－164とＰ－169の2本で、壁溝から0.9m離れた位置に2m間隔にある。Ｐ－164の柱穴は径0.5m、深さ0.4mで、柱根の痕跡が観察された。Ｐ－169の柱穴は径0.35m、深さ0.35mを測る。

この住居内に十数個の小ピットが見られたが、この住居に伴うことが確実なのは、前述の2本の柱穴以外ではＰ－84である。このピット内からは土師器甕の破片が重なって出土した。



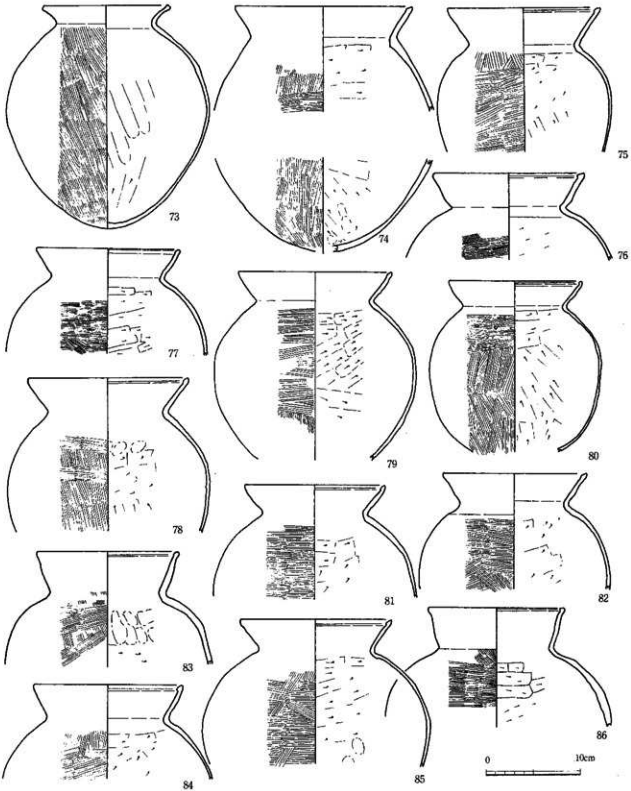
第13図　竪穴住居３実測図および出土土器位置図



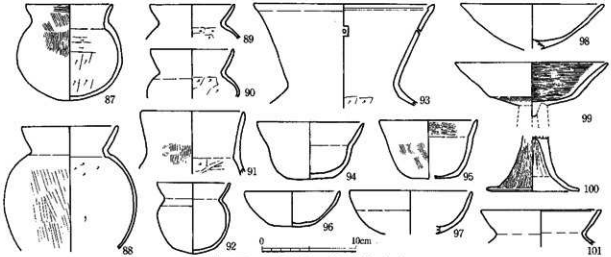
第14図　Ⅰ区全体図

住居内からは大量の土師器が出土した。完形品はほとんどなかったが、破片が大きく、復元できるものが多い。この土器群のまとまりが途切れる所に住居の壁溝がある。

また住居検出面より5cm程高いレベルで、壁溝に立てられていた壁の跡が、幅7～8cmの黒い帯状に観察された。図版七の左2枚目の写真にその痕跡を見ることができる。黒い粘土であるから、木質の板壁であろう。



第15図　竪穴式住居３出土遺物（１）



第16図　竪穴住居３出土遺物（２）

住居の壁溝・板壁・土器群・周辺のピットの関係を、断面の模式図にしたのが第13図である。

炉跡は検出されなかった。なおP-171は炭・灰を含むピットであるが、P－159、161、165、172と同様に壁溝を切るものなので、竪穴式住居より後の遺構である。

竪穴式住居3出土遺物

（73～86）は土師器甕。口縁端部が内に肥大し、胴部外面がハケ目、内面がヘラケズリを施すものがほとんどである。いわゆる布留式甕の典型例である。胴部の器壁は薄いものと厚いものとが混在する。また（73）は産地が違うようで他とは際立った違いを見せる。

（87～92）は甕ではなく小型の壺とした。口縁部はやや内湾して終わるものが多く、胴部内面はヘラケズリ。（93）はいわゆる布留系直口壺。口縁部に焼成後の穿孔がある。

（94、95）は段の痕跡を残す鉢。（96、97）は坏。（97）の外面上部はナデ、下部はケズリの痕跡がある。

（98～100）は高坏。（98）はナデ調整。（99）の内面は細かいハケ目を施す。

（101）は甕で、前述の（73～86）より小型のものである。

以上はすべて土師器であり、須恵器は全く含まない。前述の大溝105出土遺物より新しく、須恵器登場より以前の時期の一括遺物となる。

竪穴式住居4

調査区の南半部中央で検出した。径7.0mの円形で壁溝が周るが、その北半は削平されて残存していなかった。壁溝の幅は0.2～0.3m、深さ0.1m。

壁溝は1本だけの検出であったが、それに伴う柱穴は多数あり、3回の重複があったものと考えられる。構成する柱穴数は4本、5本、6本で、柱間寸法はそれぞれ2.5m、2.5～2.7m、2.2～2.5mである。このような重複は確認できるが、柱穴どうしの切り合い関係が明確でなく、前後関係は明らかでない。

住居の中央ピット（P－21）は1.9×1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は黒色土であるが、炭・灰はほとんど含まれていない。この中央ピットから西に0.4m離れてP－24がある。規模が1.9×1.0

mで、P－21とほとんど変わらないが、深さは0.5mと深くなる。このピットは炭・灰をほとんど含まない。

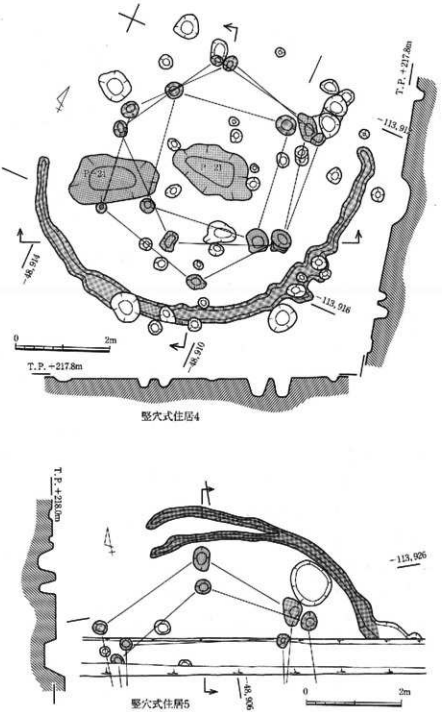
P－21と24の二つのピットは同じ住居内で規模や埋土が類似しており、同様の性格のものと考えたいが、前者は住居内の中央、後者は住居内の西端にある。この時期の竪穴式住居はP－21のように中央にあるのが通例なので、P－24は例外的なものとなる。

なお竪穴式住居の柱穴が4、5、6本と重複する例は、当倉垣遺跡においては、後述の竪穴式住居5と、本調査区南120mのハイ原遺跡（当時の名称）D区で検出されたSH47がある。ハイ原遺跡のものは報告者が弥生時代Ⅲ～Ⅳ様式としているので、今回の住居跡はそれより古い時期のものである。

竪穴式住居5

調査区の南東隅で検出した。10個ほどの小ピット群とそれを囲む円弧状の溝で構成される。溝は住居の壁溝であり、途中で二又に分かれる。住居の西半部分は削平されており、壁溝は途切れる。二又の形状から、溝は二時期と考えられるが、切り合いは明確ではなかった。溝の幅は0.2～0.3m、深さ0.1mを測る。またその円弧から復元すると、直径7m前後の円形竪穴式住居となる。

住居の南半部が調査区外で全体像は不明であるが、小ピット群のあり方において、距離および角度から4、5、6本の柱穴



第17図　竪穴住居４・５実測図

をもつ住居の重複と考えられる。このような重複例は、前述したように竪穴式住居4とハイ原遺跡SH47がある。

なお柱穴は径0.3～0.5mで、深さは0.3～0.4mを測る。柱痕は見当たらなかったが、遺構としては非常に明確なものである。

竪穴式住居6

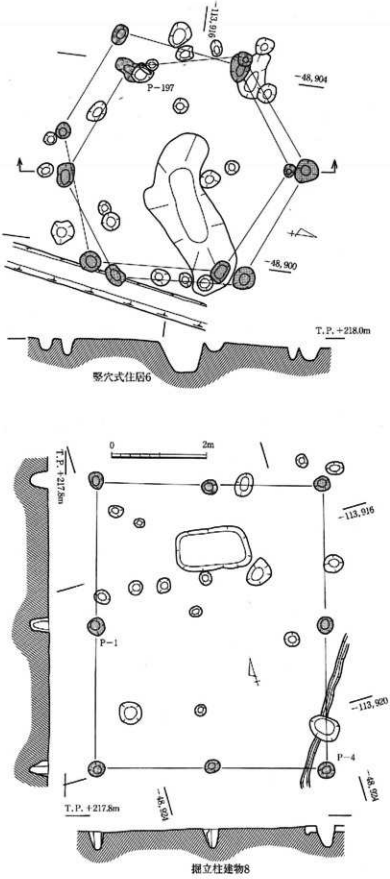
竪穴式住居4から東へ4m、竪穴式住居5より北へ6m離れて所在する。

小ピット群が径5mの円形に並んだ様相が観察されるもので、竪穴式住居跡と判断した。この周辺は現水田の造成の際に地山の削平があった所で、住居の壁溝はすべて失われ、柱穴群のみが残存したものである。

柱穴群が円形に並んでいることは明らかであるが、柱間寸法や角度が同じものと仮定すると、住居に伴う柱穴の判定は難しくなる。試行錯誤の結果、6本柱の住居2棟の重複と考えた。しかし、もし柱間寸法や角度が一定でない住居を考えると、4本・5本・6本柱の建物の数回にわたる建て替えを考えることは可能である。

掘立柱建物8

調査区の南西部に所在する。東西2間（4.9m）×南北2間（6.0m）の規模で、方向はN－16°－Eを測る。柱穴は径0.3～0.4m、深さ0.4mで、柱痕の観察されるものが多い。建物南東隅の柱穴P－4は竪



第18図　竪穴式住居6・掘立柱建物8実測図

穴式住居3を切る。P－1の柱穴から「ての字」口縁の土師器皿（114）が出土しており、このことからこの建物は平安時代のものと考えられる。

掘立柱建物9

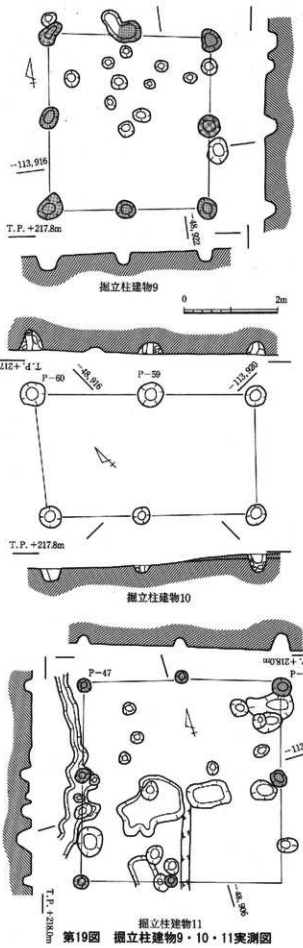
掘立柱建物8の北東部に重なった位置に所在する。東西2間（3.4m）×南北2間（3.7m）の規模で、方向はN－7°－Eを測る。柱穴は径0.3～0.4m。深さ0.2～0.3mで、柱痕の明確なものはなかった。出土遺物は弥生式土器とともに古墳時代後期と考えられる須恵器片がある。にわかに決め難いが、この時期の建物としておきたい。

掘立柱建物10

竪穴式住居3と4の中間の位置に所在する。東西2間（4.8m）×南北1間（2.5m）の規模で、方向はN－44°－Wを測る。なお南西隅の柱穴は位置が不整なため、建物の平面形が少し歪つとなっている。柱穴は径0.4～0.5m、検出深は0.2～0.5mで、すべてに柱痕が見られた。出土遺物が少なく時期が不明だが、竪穴式住居3に近接し方向も同じであることから、この建物は竪穴式住居3と同時期で関連あるものとしておきたい。

掘立柱建物11

竪穴式住居4と6の間に所在する。東西2間（4.2m）×南北2間（4.2m）の規模で、方向はN－15°－Eを測る。南東隅の柱穴は検出できなかった。柱穴は0.3～0.4m、深さ0.2～0.4m。P－47、222の柱穴より土師器碗（113）や黒色土器碗が出土し、また掘立柱建物8と方向が近似しているので、同建物と同時期の平安時代と考えたい。



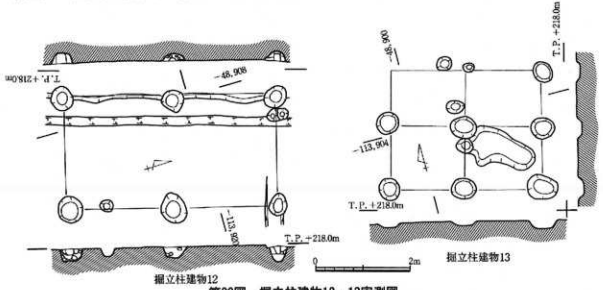
第19図　掘立柱建物9・10・11実測図

掘立柱建物12

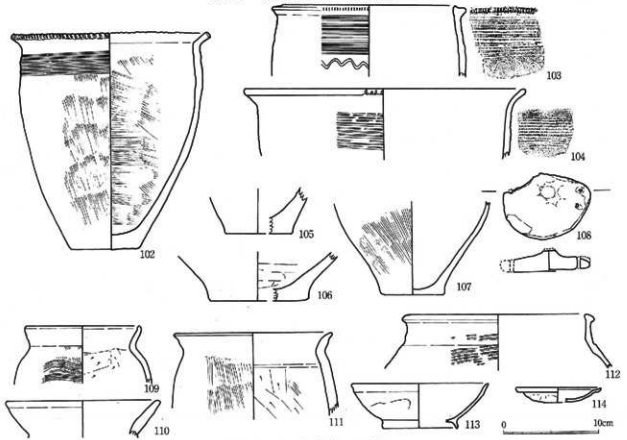
掘立柱建物11の南に接して所在する。東西1間（2.3m）×南北2間（4.5m）で、方向はN－14°－Eを測る。柱穴に柱痕が明確に観察された。出土遺物が少なく、遺物から時期は決め難いが、建物11に接し、方向が同じであるところから、建物11と12とは同時期でしかも一連のものと考えることは可能であろう。

掘立柱建物13

調査区の北東部に所在する。東西2間（3.2m）×南北2間（2.5m）、方向はN－15°－Eを測る。



第20図　堀立柱建物12・13実測図



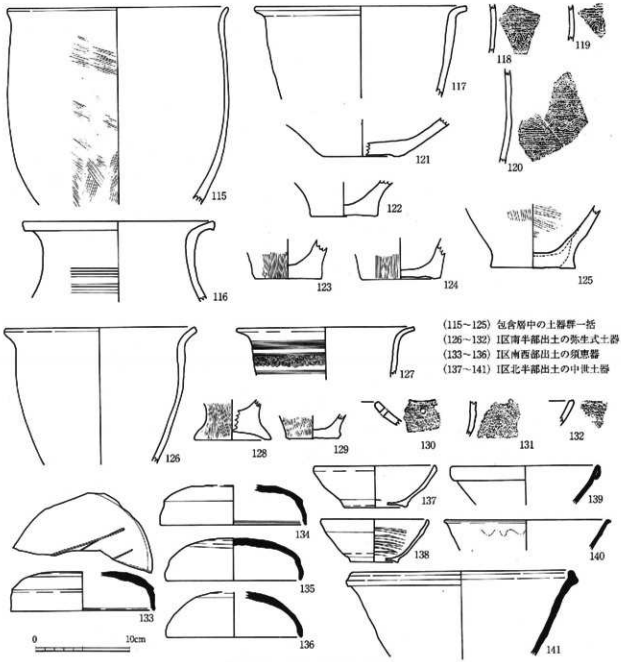
第21図　Ⅰ区各遺構出土遺物

柱穴は径が0.4～0.5mと大きいものだが、検出深は0.1mと浅いものであった。建物の北東隅の柱穴が検出されなかったのは削平されたためであろう。

この建物より北は調査区の北東部となる。この部分を覆う遺物包含層は弥生式土器だけでなく中世のものが多くなる。従ってこの建物およびこれより北にあるピット群は、中世の時期となろう。なおこの中世包含層は、調査区東側セクションを観察すると、この建物付近でなくなり、それより以南では弥生包含層となる。

Ⅰ区出土遺物

(102) はP－52内から出土した弥生時代前期末の甕。肩部に6条平行のヘラ描き沈線文、口縁端部に刻目、内外面にハケ目。一応前期末としたが、中期初頭となる可能性もある。



第22図　Ⅰ区包含層出土遺物

(103) はP－186から出土した。大阪ではあまり見られない甕である。口縁端部を外へ水平につまみ出し、その端部に刻目。断面は一見逆L字状を呈している。肩部に半裁竹管を用いての2条を単位とする平行の沈線を繰り返して櫛描き状に仕上げ、その下には同じ道具を用いての波状文を施す。いわゆる播磨系のものになるかも知れない。

(104) はP－145から出土した。6条を単位とする櫛描き直線文を施す。

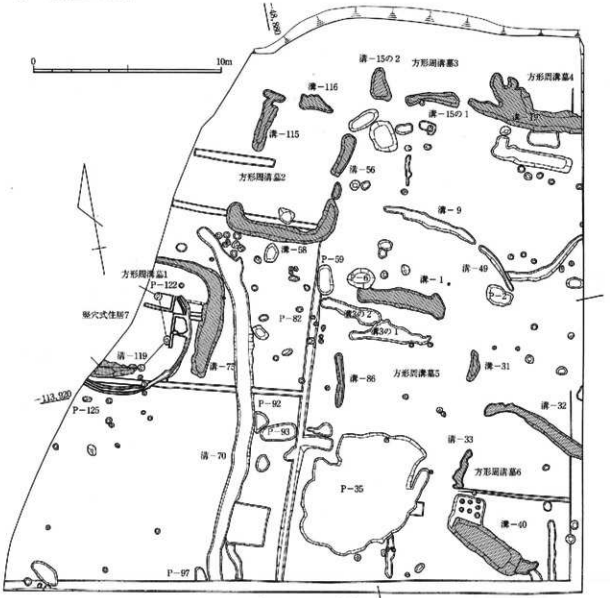
(105～107) はそれぞれP－145、240、186から出土した底部。(106) には籾跡がある。

(108) はP－270から出土した蓋で、相対する位置に二孔ずつが穿たれている。

以上の (102～108) は弥生時代前期末～中期前葉のものである。

(109、110) はP－50から出土した布留式の土師器甕片。(111) はこの周辺のピットから出土した。以上の (109～111) は古墳時代のものである。

(112) は調査区北端のP－339から出土した中世のタタキ鍋。ただしこのP－339は近年の溝遺構の可能性がある。



第23図　J区全体図

(113) はP－47から出土した土師器碗。高台がしっかりしており、南河内出土10世紀前後のものに似る。(114) はP－1から出土した「ての字」状口縁土師器小皿。以上の (113、114) は平安時代のものである。

(115～125) は包含層中でも土器群としてかたまって出土したもので、弥生時代中期前葉の一括遺物として扱うことが可能である。

(126～132) はⅠ区南半部のうち、主に東部から出土した弥生式土器。

(133～136) はⅠ区南半部のうち、主に西部から出土した須恵器坏蓋。(133) の天井部にはヘラ記号がある。

(137、138) は瓦器碗、(139、140) は白磁碗、(141) は東播系の捏鉢。以上の (137～141) は中世のもので、Ⅰ区北半部から出土した。

第５節　Ｊ区の調査

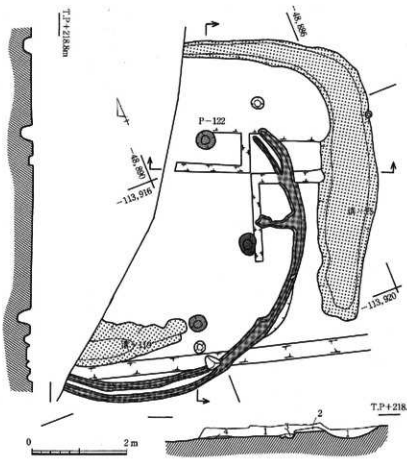
Ｊ区はⅠ区より東へ数m離れて設定した調査区である。当調査区では、弥生・古墳時代の遺構が検出された。

竪穴式住居7

調査区の西端中央で検出した。Ⅰ区の竪穴式住居6より東に7m離れた位置にある。

径7mの円形住居跡で、壁溝が周る。しかし住居の西半部分は調査区外で、全容は明らかにできなかった。壁溝は幅0.1～0.2mで、深さは床面から測ると0.1m。住居外堤が一部に残存し、そこから測ると0.2～0.3mの深さとなる。また壁溝は途中で二又に分かれており、住居が拡大あるいは縮小されたものと推定できる。

柱穴は検出したものは3本であるが、その位置から推測すれば6本柱の住居となろう。なお南端に位置する柱穴は溝－119と重なっており、精査を繰り返したが検出できなかった。従って溝－119が



第24図　竪穴式住居7と方形周溝墓1実測図

柱穴を切ったものと考えられる。なお柱穴に関する限り切り合うものはなく、建て替えの痕跡はなかった。従って住居の構造物そのものの建て替えはなかったとしてよいであろう。

いわゆる中央ピットはなかった。後世の削平を受けたか、あるいは調査区外に所在するものと考えられる。

住居内の壁に沿った位置に、石包丁の未成品（306）が出土した。また住居内の埋土から甕片（162）、柱穴の一つのP－122から完形に復元できる甕（163）が出土した。中期初頭のものとなろう。

方形周溝墓1

竪穴式住居6と全く重なる位置で検出した。L字状の溝－75と、住居内で検出した溝－119とで構成される。周溝墓の西半は調査区外で、全容は明らかでない。

溝－75は東溝部分は幅1.1m、深さ0.2m、北溝部分は幅0.4m、深さ0.1mとなる。後者は削平を受けて幅も深さも小さくなったものと考えられる。

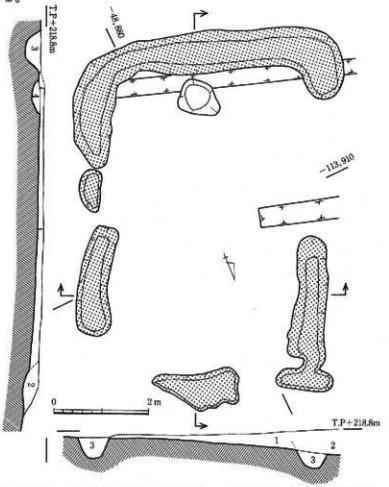
溝－119は幅0.9m、深さ0.5mを測る。この溝は位置および方向から溝－75と関連あるものと判断でき、南北5.5mの方形周溝墓と考えられる。溝－75の東溝と溝－119の間は途切れており、従ってこの周溝墓は溝の全周しないものとなる。

周溝墓と竪穴式住居との関係については、両方にまたがるセクションの精査を繰り返したが、溝－75と住居内の埋土との区別がつかなかった。しかし前述したように、溝－119は住居の柱穴を切ったと考えられるので、住居廃棄直後に方形周溝墓が造られたものと考えてよいであろう。

なお周溝墓には主体部が検出されなかった。これも後世の削平を受けたことによるものと考えられよう。

方形周溝墓2

調査区の北西部で検出したもので、周溝墓1より北東に2.5m離れて所在する。南北6.3m、東西4.0mの範囲に幅0.7m前後の5本の溝が途切れながら連続して方形に取り囲む。これらのうち、溝－58は周溝墓の南西と南東、溝－115は北東のコーナーに当たる。

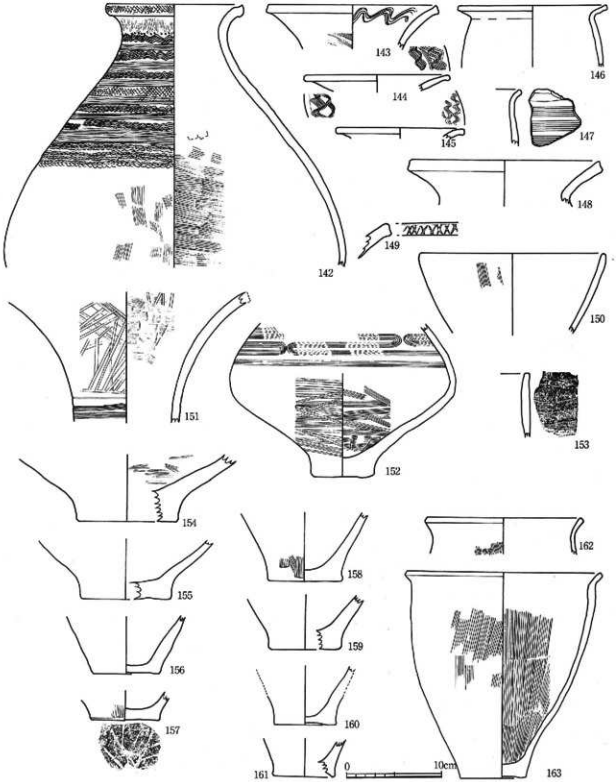


第25図　方形周溝墓2実測図

溝の検出深は0.2～0.4mである。

周溝墓には高い盛土があったはずであるが、削平を受けて0.1mの厚さしか確認できなかった。また盛土は早い時期に周溝内やその外にまで流出しており、盛土層とこの流出土層との区別はほとんど不可能な状態であった。この盛土層内から壺の口縁部（191、192）が出土している。

周溝墓には主体部が検出されなかった。墓壙は盛土内におさまるもので、その掘削が地山まで



第26図　溝19および竪穴式住居7出土遺物　（162・163）が竪穴式住居、他は溝19出土

到達するものではなかった、ということであろう。

方形周溝墓3・4

調査区北東隅で検出した。周溝墓2より北東に2m離れて二基が東西に並んで所在するものである。溝－15および溝－19で構成されるが、その北半分は中世以降に大きく削平されている。

溝－15は当初は一つのL字溝と考えたが、遺構を掘り下げると中途で途切れるものと判明した。また溝－19は東西溝の途中で北に延びる溝が接続するT字溝となる。

溝の形状から、周溝墓3は東西5.5m。同4は東西3m以上の規模になると判断した。そして両周溝墓は一部で溝を共有する。主体部は検出されなかった。

溝－19には弥生式土器がまとまって出土した。

第27図　溝－19実測図

溝－19出土遺物

（142）の壺は胴部に比べ口縁部が狭いものである。口縁端面に格子文、頸部に列点文、頸部から胴部上半にかけて櫛描きの直線文と波状文を交互に繰り返し、一部に格子文を施す。（143～145）は壺の口縁部で、波状文を施す。（149）の口縁端面にはヘラ描きの格子文。（151）は大きく開く壺の口縁部。（152）は腹部に流水文がある壺で、胎土に金雲母が多く含まれており、他のものと際立った違いを見せている。おそらく産地の違いであろう。（153）はほぼ直立する口縁部で、細頸壺と思われる。

（146、147）は甕の破片。

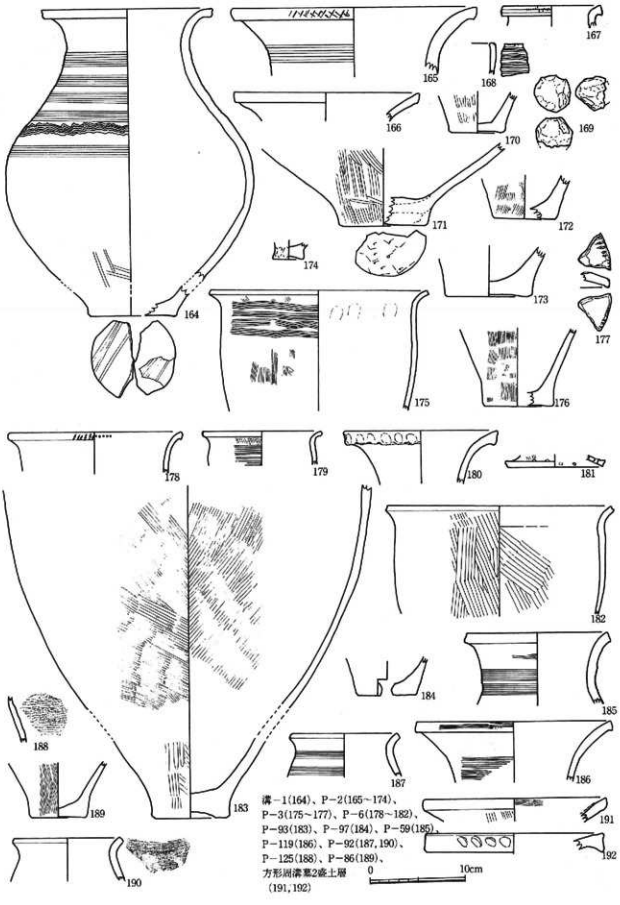
（154～161）は底部で、（157）には二重の木葉痕。（158）には籾跡が見られる。

方形周溝墓5

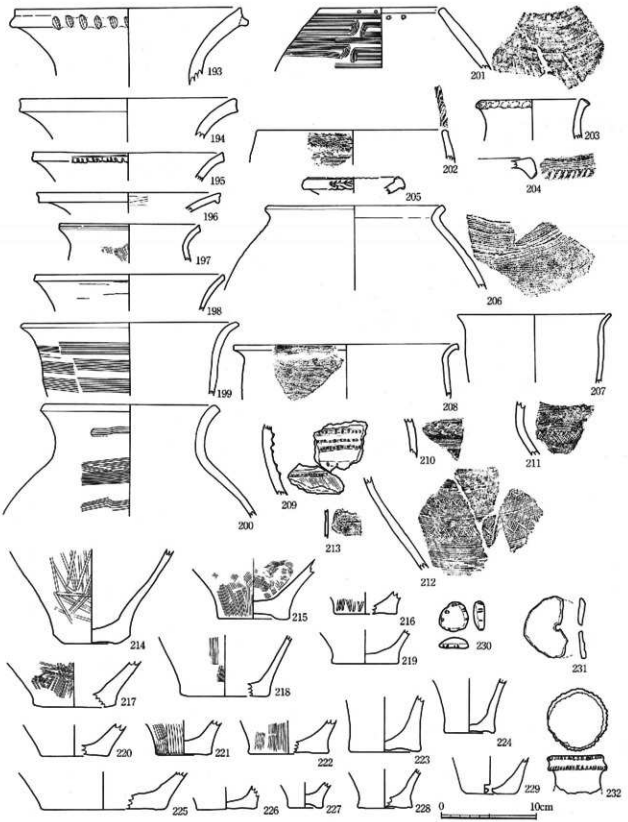
調査区中央にあって周溝墓1より東に6.5m離れた位置に所在する。かなり削平を受けており、溝－1、86、31の3本の溝がかろうじて残存したものと考えられる。規模は東西7.0mで、南北は不明だが6mぐらいになろう。なお北辺に相当するのは溝－1ではなく、溝－3の可能性がある。この周溝墓自体が削平されているので検証のしようがなかったが、今のところ調査当初通りに溝－1を周溝墓のものとしておきたい。

方形周溝墓6

調査区南東隅で検出した。かなり削平を受けており、溝－31、33、40がかろうじて残存していた。南北6.0m、東西5.0mの規模であるが、他の方形周溝墓より方向が東へずれている。主体部は検出されなかった。



第28図　J区弥生時代各遺構出土遺物



第29図　J区包含層出土の弥生時代遺物

P－2とP－6

P－2は方形周溝墓5より北東へ2m離れて所在するもので、1.2×1.0mの規模で、深さ0.35m。P－6は方形周溝墓5の北西に接して所在するもので、1.5×1.0mの規模で、深さ0.4m。この二つのピットは形状・規模が類似しており、また弥生式土器の破片が多く出土している。同様の性格を持つ遺構と考えられる。

P－59とP－93

P－59は方形周溝墓2と5の中間の位置に所在し、1.6×0.8mの規模で、深さ0.25m。壺の口頸部（186）が出土している。P－93は方形周溝墓5より南西へ3m離れて所在し、1.9×0.9mの規模で、深さ0.15m。甕の胴部下半部（183）が出土している。

この二つのピットは、その形状から土壙墓になるものと思われる。

弥生時代の遺構・包含層出土遺物

（164）は溝－1から出土した壺。胴部上半に櫛描きの直線文と波状文。底部外面にミガキの痕跡がある。

（165～174）はP－2からの出土。（169）は用途不明の土玉。（171）の底部外面にはケズリの痕跡。（174）は製塩土器か。

（175～177）はP－3の出土。甕（175）の肩部に櫛描き直線文を施すが、やや疲をうつ。（177）は蓋で、端面の上下に刻目。

（178～182）はP－6出土。（178）の口縁端部に刻目とその内面に列点文。（180）の口縁端部は指頭圧痕を連続させて文様化している。（181）は蓋。（182）の甕には荒いハケ目。

包含層から出土した弥生式土器は豊富である。壺（193～198、200、204～206）は外反して開く口縁で、端面には刻目やヘラ描き、櫛描きの文様がある。無頸壺（201、202）には櫛描きによる流水文、波状文、直線文の文様。

甕（199、208）の頸部には櫛描き直線文があるが、いわゆる播磨型になるかも知れない。

前期の貼付突帯文（209）。中期の波状文でも（210）のように扇形文の連続したものや、（211、212）のように三角の山形の連続したものがある。（213）は流水文。

（214～229）は底部。（229）には焼成前の孔が穿たれる。

特殊なものとしては、刻目を持つ土玉（230）や土器の破片を再利用した紡錘車（231）。（232）は他に例がなく用途不明だが、胎土からして弥生時代であることは確実である。

P－35

調査区の南端中央で検出した土壙である。南北・東西ともに6m程の不定形を呈し、深さ0.5mを測る。埋土は黒色土。

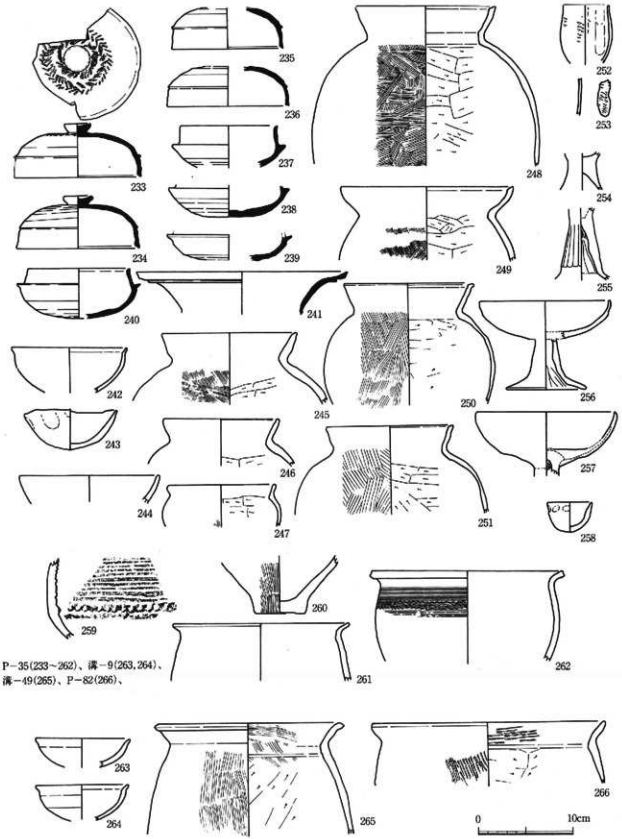
この遺構の底面は平らではなく、またピットがなかったので竪穴式住居でないことは確かである。しかしどんな遺構なのか、その性格については不明と言わざるを得ない。

埋土中より古墳時代中期の須恵器・土師器が出土した。須恵器は初期とは言えないが、当地域

では最も古いものであり、また他の土師器とともに一括出土遺物となり、注目される。

P－35出土遺物

(233、234) はつまみを有するので、高坏の蓋になろう。しかしこれに合う須恵器の高坏は出土



P－35(233～262)、溝－9(263,264)、
溝－49(265)、P－82(266)、

第30図　J区古墳時代以後の遺構出土遺物

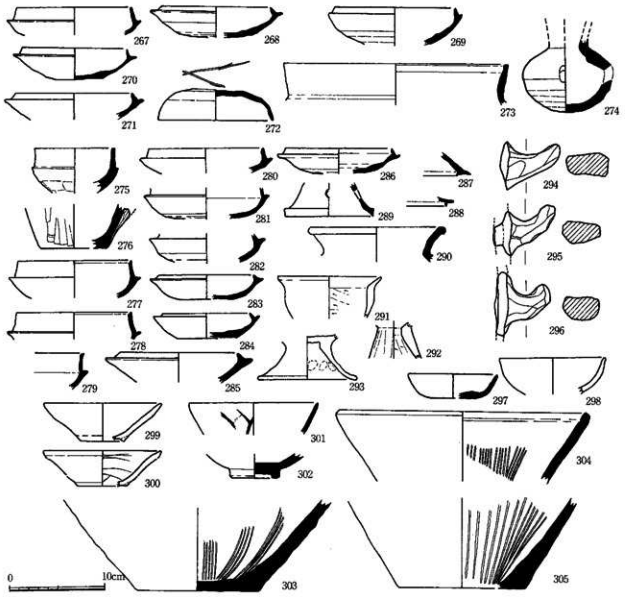
しなかった。(233) のつまみの周りに刺突文の列が三重に施される。

(235、236) は坏蓋。(237～240) は坏身。陶邑編年のⅠ型式の4段階前後に位置付けられよう。(241) は壺の口縁部。

(242～244) は土師器の鉢。(245～251) は土師器の甕。胴部内面はヘラケズリであるが、器壁は厚い。口縁端部が内に肥厚することがなくなる段階のものである。

(252、253) は製塩土器で、外面にタタキ目。(254～257) は土師器の高坏。坏部はナデ調整で、ミガキ・暗文は見られない。

(258) はミニチュアで、弥生時代のものか。(259～262) はこの遺構から出土した弥生式土器で、混入したものである。



溝－70(267～274)、包含層 (275～298)、石垣擁壁の裏込土 (299～305)

第31図　J区古墳時代以降の遺物

溝－70

調査区の南西部を蛇行しながら延びる南北溝である。幅0.7～0.9m、深さ0.2m、検出長20mを測る。埋土は黒色土。北端で溝が終わるが、これは後世の削平によるもので、本来はもっと長く延びていたものと考えられる。

遺構の底面には半月形の工具痕が多く見られ、鍬類の道具を打ち下ろして掘削した様相を呈している。

遺構内から古墳時代後期の須恵器が出土しており、P－35より後のものであることは明らかである。

注目すべきはこの遺構の北端部が弥生時代の方形周溝墓1と2の間を通ることである。これが偶然ではなく意識的なものとしたら、古墳時代後期にまで二基の周溝墓の盛土が残存し、その間の谷部分にこの溝が掘削されたことになる。もしそうであるなら、数百年以上経っても周溝墓は墓として認識されていた可能性を考えることができる。

この溝からは須恵器の坏（267～271）や坏蓋（272）、甕（273）、甑（274）が出土している。

J区古墳時代以降の出土遺物

溝－9と溝－49は同一遺構で、奈良・平安時代の鉢や甕（263～265）が出土している。

（275～298）はJ区包含層から出土した。注目すべきものをピックアップすると、（275）は小型の須恵器坏で、底部外面にヘラケズリ。（276）は須恵器の把手付きの碗で、縦方向のヘラケズリ。ともに古い段階の様相を示す。

J区の北辺は水田造成のための石垣擁壁があり、その裏込め土のなかから中世の遺物がまとまって出土した。瓦器碗（299、300）や青磁碗（301、302）、備前焼の擂鉢（303）、丹波焼の擂鉢（304、305）がある。

第6節　H～J区出土の弥生時代石器と縄文式土器

1・J区出土の弥生時代石器

（306）はJ区の竪穴式住居7から出土した石包丁の未成品。（307）は石包丁の完形品で、包含層から出土した。（308～314）は石包丁の破片。

（315、316）は磨製石斧の破片。（317、318）は片刃石斧の完形品で、（318）の方の石材はチャートで珍しい。

（319）は磨製石剣で、剣先部が欠損している。石材は高島産であろう。石剣は当能勢町では5例目で、近在の遺跡では原田遺跡の方形周溝墓の主体部から完形のものが出土している。

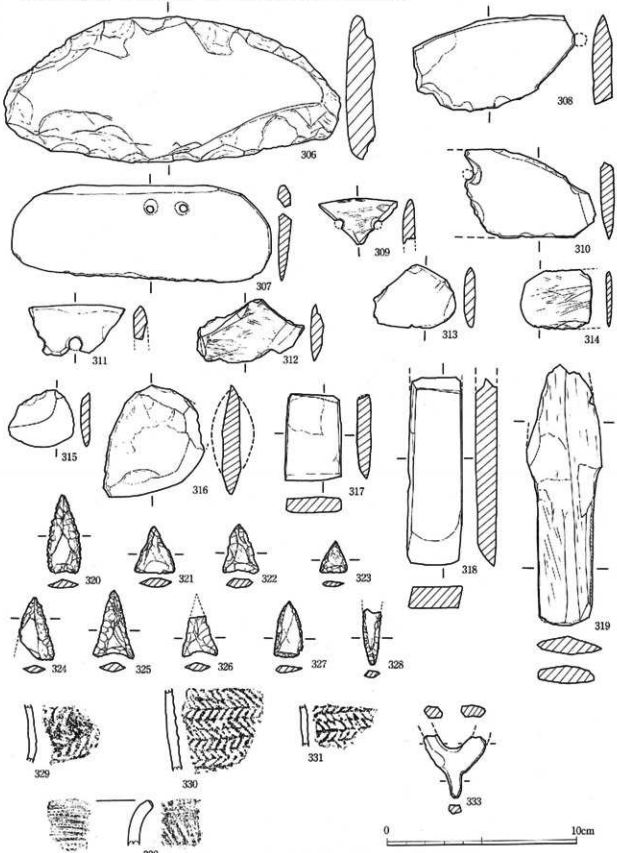
（320～327）はサヌカイト製の石鏃。（328）は石錐であろう。

縄文式土器

主にH区から縄文式土器片が出土した。（329～331）は押型文で、早期のもの。能勢町において縄文早期出土遺跡は、地黄北山遺跡、野間遺跡、中筋遺跡、大里遺跡に続いて5例目となる。（332）

は口縁端部に刻目、内面に貝殻条痕を持つ。

なお（333）の鉄器は時期不明のものである。古墳時代～近代の遺物とともに出土した。中世かと思われるが、確証はなく、取りあえずここに報告しておく。



第32図　Ⅰ・Ｊ区の弥生時代石器とＨ区の縄文式土器

第７節　Ｌ区の調査

Ｌ区は98年度調査におけるＧ区の東に設定した調査区である。東西に走る幅4m、延長115mの水路部分と圃場における切土部分4ケ所とが調査の対象で、櫛の歯状を呈する調査区となった。西からＬ－1～4区と名付けた。当調査区では、古墳・飛鳥・奈良時代の遺構が検出された。

自然谷

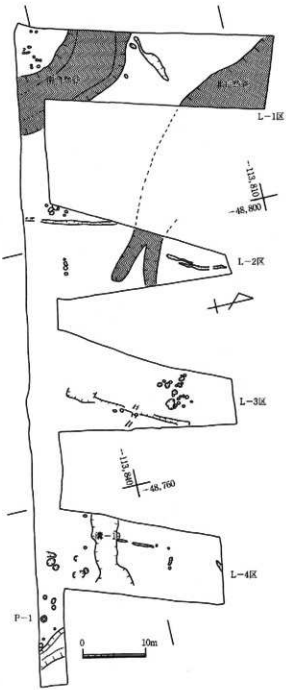
Ｌ－1区で2本の自然谷を検出し、その位置関係から南自然谷・北自然谷と名付けた。

南自然谷はＬ－1区の南東から入って同区内で西へカーブするもので、幅10m、深さ0.5～0.8mを測る。埋土は黒色粘土に灰白色の砂が挟まるものである。この遺構の西端で、堰の痕跡を検出した。谷の流れに対して直角に杭を4本打ち並べて横木を渡すもので、本来はもっと多くの杭が打たれていたものであろう。この堰の上流部では、アトランダムな位置と方向でほぼ水平に板や自然木が検出された。堰によって水位が上って水溜状になり、このような木が浮かんで漂っていたようである。この谷内からは布留式の土師器や須恵器が出土した。

北自然谷は、上記の南自然谷より12m北に離れて南東から北西に向かって流れるもので、その南肩を検出した。北肩は調査区外となったので、谷の幅は不明である。深さ0.8m、埋土は黒色粘土。調査工事および事後の圃場整備工事の都合により、この遺構は全掘せず、4本のトレンチで位置と深さを確認するに止めた。この谷の上流はＬ－2区においてＹ字状の浅い谷となり、さらに上流のＬ－3区では痕跡すら見当たらなかった。この谷からは、布留式の土師器が出土している。南自然谷と北自然谷は時期を同じくするものであろう。

自然谷からの遺物は、時にはまとまり時には単独で出土するもので、一括投棄されたものとは考えにくい。従って同時期一括遺物として扱うことはできないものである。

土師器の高坏（345～347）、小型丸底壺（348、



第33図　Ｌ区全体図

349)。(350) の土師器は内面に絞り目が観察されたので、高坏の脚部と考えた。このような高坏は他に例を見ないもので、製作者の個性かとも考えられる。(351) は土師器の把手付きの甕。(352～356) は須恵器の坏および坏蓋。(357) は北自然谷から出土した土師器高坏の坏部。

以上の自然谷の遺物は、古墳時代中期～後期の少し幅広い時期が与えられるだろう。

L区からは、他に小ピットや溝などが検出されているが、組み合うものがない。

P－1

L－4区の東に飛び出した調査区で検出されたピットで、径1m、深さ0.4mを測る。埋土は上層が黒色粘質砂、下層が砂ブロック混じりの黒色粘土。この上層で完形の曲物が2点と木製の皿2点、完形の須恵器および土師器の坏の破片が出土した。柱痕は見当たらず、柱穴とは考えられない。埋土からして水溜のものかと考えられる。

曲物 (334、335) は、蓋と身のセットになるものと考えられる。当町内の屋組遺跡では10世紀中葉の井戸から同様のものが出土しており、その例に従って前者の方を蓋とした。しかし後者の方が蓋の可能性もある。

木製の皿 (336、337) はそれぞれ径28.0cmと23.0cm、深さ1.8cmと1.0cmを測る。ともに一枚板から削って製作された刳り物である。完形であるが、後者の方は風化し、また土圧によって歪みが生じている。

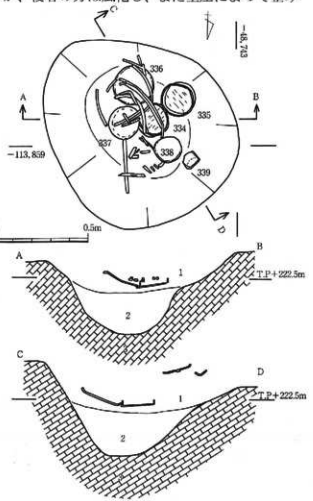
完形の須恵器坏蓋 (338) は裏返った状態で出土した。土師器 (339) は、口縁端内側に沈線を施し、全体をナデて仕上げるものである。暗文はなかった。

この遺構の出土遺物は、奈良時代でも終わり頃に位置付けられよう。

溝－19

L－4区の中央で検出した遺構で、幅4～5m、深さ0.1m。溝と名付けたが、自然地形の浅い谷と言った方が正確であろう。埋土は黒色土で、飛鳥時代の遺物がまとまって出土した。意図的にその場所に置いたものではなく、偶然に入り込んだという状況で検出された。

(340) は土師器の甑の底部である。外面に荒いハケ目、内面に下から上への方向にケズリを施す。(341) は須恵器の小壺。(342～344) は須恵器の坏であるが、このうち (343、344) は焼成が悪く、一見土師器風の様相を呈する。



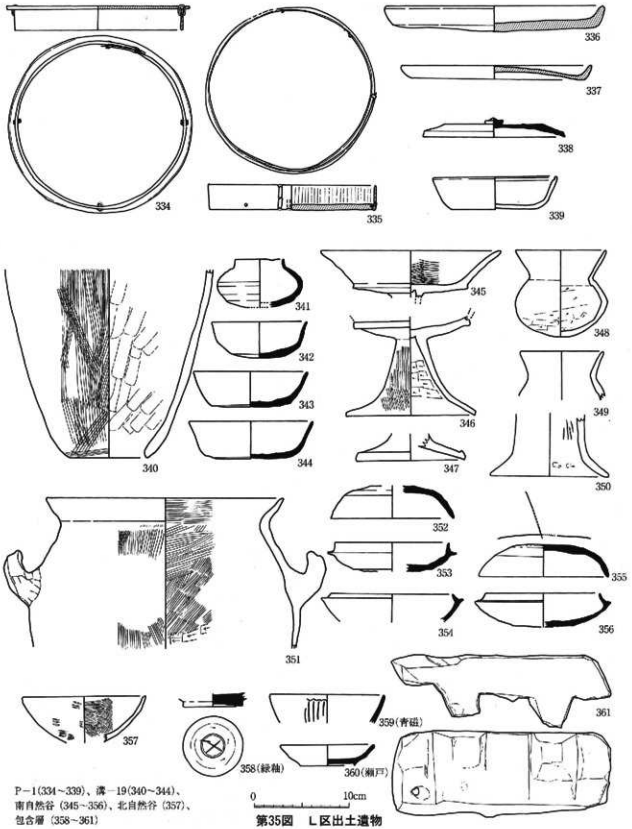
1. 黒色粘質砂土　2. 黒色粘土砂ブロック混じり　3. 青灰色礫砂（地山）

第34図　L区P－1実測図

この遺構の出土遺物は、飛鳥時代後半に位置付けられよう。

包含層出土遺物

L区は他の調査区同様に地山面直上の包含層に、中世やそれ以前の遺物が出土する。これは中世になって田畑として開発された際に、遺構の土を切り盛りしたものと考えられ、その盛土層が



P－1(334～339)、溝－19(340～344)、
南自然谷(345～356)、北自然谷(357)、
包含層(358～361)

第35図　L区出土遺物

包含層となる。従って包含層には近世やそれ以降の遺物を含むことは少ない。

(358) は緑釉陶器片で、中世の開発の際の混入であろう。高台部にまで施釉され、十字のヘラ記号がある。青磁 (359)、瀬戸 (360)。(361) は下駄の未製品である。製作途中で放棄されたものであろう。

包含層からの遺物で特記すべきものとして、磨製の石刀 (422) と磨製石斧 (423) がある。L区では弥生式土器の出土はなかったが、70～80m離れたJ・M区では弥生時代の遺構が多く検出されているので、これらの石器もこの時代のものと考えたい。(422) の石刀は、破片の下部が柄部、上部が刃部となる。刃部の断面図によって石刀であることがかろうじて判明する。(423) は柱状片刃石斧の破片であるが、大きく欠けていて天地すら不明である。

第8節　M区の調査

M区はJ区より東へ25m離れて設定した調査区である。圃場の切土部分の調査で、直角三角形状の調査区である。ここでは弥生時代と中世の遺構を検出した。

P－14

調査区の北部に所在するピットで、検出長2.0m、幅0.4m、深さ0.15mと溝状を呈する。遺構の西は調査区外となり、全容は不明である。弥生式土器の破片がかたまって出土した。取り上げ後に接合復元すると、口径24.0cm、器高25.0cmの甕 (362) であることが判明した。表面が摩滅しており、調整は不明。

P－40

調査区 中央東端で検出したピットで、径0.5m、深さ0.2m。埋土は黒色土。遺構内から弥生式土器の壺の底部 (365) が正立した状態で出土した。本来は完形品が立っていたものであろうが、後世の削平によって底部のみが残存していた。この遺構の性格については祭祀あるいは周溝墓関係等が考えられるが、積極的な根拠はなく、不明と言わざるを得ない。

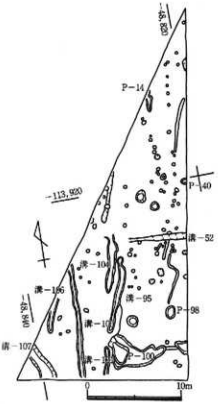
溝－106

調査区の南西部に所在する溝で、検出長4m、深さ0.15mを測る。埋土は黒色土で、弥生式土器の甕 (363) が出土した。破片状態であったが、ほぼ完形に復元できるものであった。

出土した甕は口径18.0cm、器高22.5cmを測る。胴部の最大径の位置が中央よりやや下にあり、(362) よりも新しい様相を示す。口縁部端面に刻目を施し、胴部外面にはハケ目。

溝－107

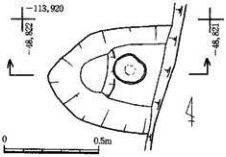
調査区の南西端を、南東から北西に向かって走る溝で、幅1.3

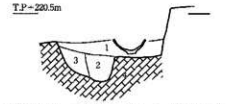


第36図　M区全体図

m、深さ0.5mを測る。埋土は黒色土。出土遺物は少ないが、1点だけ図化が可能であった。弥生式土器の底部(364)で、この遺構の時期もその頃であろう。

本調査区ではピットや溝が多く検出されたが、弥生時代の時期のものであることが確実なものは、以上の四つである。





1. 黒色粘質土　2. 黒褐色砂質土　3. 褐灰色砂質土
4. 灰黄色砂（地山）

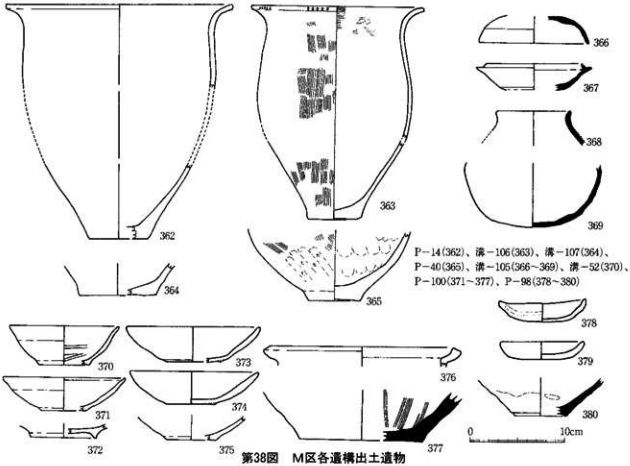
第37図　M区P－40実測図

溝－105

調査区の南西部をほぼ南北に走る溝で、検出長12m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は黒色土で、一部に黄色砂層が挟まる。(366～369) の須恵器が出土しており、古墳時代の末頃のものであろう。なおこの遺構の周辺には同時期と思われるものがほとんどない。

中世の区画溝（溝－52、104、121）

溝－52は調査区の中央を東西に走る溝で、幅0.5m、深さ0.15m。溝－104と121は後世の削平により2本の溝として検出されたもので、本来は1本の溝として繋がる。検出長は15mとなる。以上の溝からは中世の瓦器碗片等が出土しており同一時期と見られることと、二つの溝が直角の関係にあることから、区画溝の一部であることが判明した。方形の屋敷跡の北西部分である可能性が

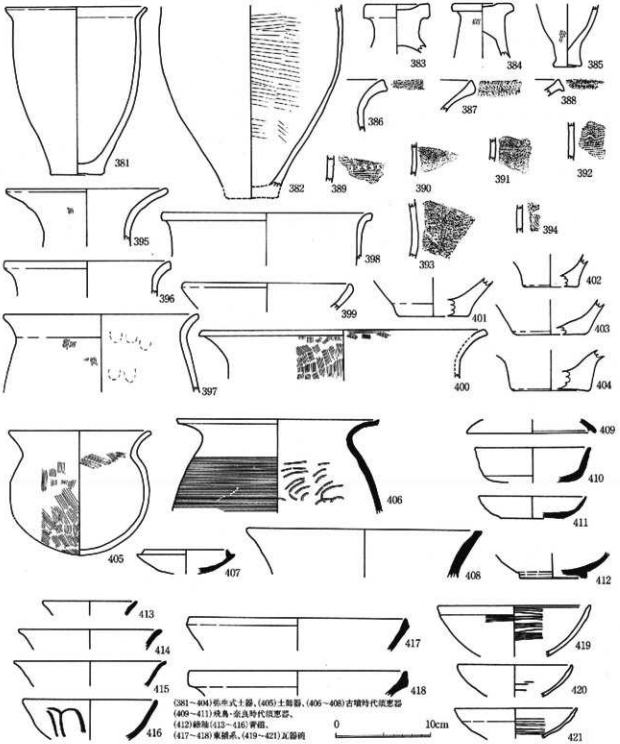


第38図　M区各遺構出土遺物

高い。区画内には建物があったであろうが、調査した範囲内では建物跡は発見できず、P－98、100が検出された。区画溝の出土遺物は瓦器や土師器の細片が多く、図化できるものは（370）の瓦器碗であった。

P－98

方形区画内に所在するピットで、径1.0m、深さ0.15m。埋土は礫混じりの黒色土。中世の土師器小皿（378、379）と瀬戸焼の碗（380）が出土している。



（381～404）弥生式土器、（405）土師器、（406～408）古墳時代須恵器
（409～411）飛鳥・奈良時代須恵器、
（412）緑釉（413～416）青磁、
（417～418）東播系、（419～421）瓦器碗

第39図　M区各包含層出土遺物

P－100

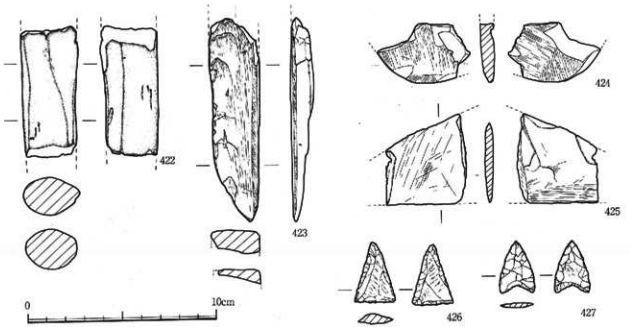
方形区画内にあって、調査区の南端部に所在する。東西6m、南北3m、深さ0.2mのピット内に、5～20cm大の石を多く入れて礫敷状にしたものである。礫のなかには焼けた石が複数あり、また埋土の一部にも焼土があったので、この遺構上で火を使用したことは確実である。しかし骨は見当たらなかったので、火葬跡ではないであろう。屋敷跡と考えられる区画内にあることから、竈等の施設ではなかろうか。

礫に混じって中世の遺物が出土した。(371～375) は瓦器碗であるが、このうち (373、374) は軟質で炭素の吸着がなく、土師器碗とも言える様相である。(376) は瓦質のものであるが、器種不明。(377) の擂鉢は一見丹波焼風に見えるが、擂り目が櫛描きなので、産地不明と言わざるを得ない。

M区包含層出土遺物

本調査区の包含層からは弥生時代から中世までの各時代の遺物が出土した。主なものを選んでみると、弥生時代では完形に復元し得た甕 (381) がある。(383、384) は蓋の頭部か甕の底部か迷うところであるが、丹波地方で類似例があるので一応蓋としておく。(385) はミニチュアの甕の底部。文様としては波状文 (386、388、390～392)、格子文 (387)、列点文 (389)、流水文 (393、394) がある。石器としては石包丁 (424、425) の破片と石鏃 (426、427) が出土している。

(405) の土師器甕は古墳時代末か飛鳥時代。(412) は緑釉陶器で高台内にまで施釉されている。(413～421) は中世のものである。13世紀あるいはそれ以降とされるものだが、(419) のように12世紀に遡るものもある。

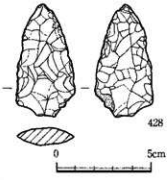


第40図　L・M区出土石器

第9節　N・O・P区の調査

N区はM区から東へ230m離れて設定した調査区である。調査の結果遺構はなく、遺物として地山面直上層から摩滅した中世の土師器・瓦器・陶器片が出土したのみであった。中世のある時期に盛土されて、水田あるいは畑として開発されたものであろう。

O区はN区からさらに東へ30m離れて設定した調査区である。遺構としてはピットや土壙が検出されたが、その時期を表わす遺物の出土がなかった。地山面直上層からは、飛鳥・奈良時代頃の須恵器や土師器片、中世の瓦器片などが出土しているが、すべて近世・近代の時期のものとともに出土している。



第41図　O区出土の有舌尖頭器

特記すべき遺物としては有舌尖頭器がある。サヌカイト製で、長さ6.0cm、幅3.1cm、厚さ0.9cmを測る。伴出遺物がなく単独で出土したので時期は不明であるが、当遺跡では西に450m離れたH区から縄文時代早期の押型文が出土しており、この石器もこの時期のものと考えたい。なお当能勢町においては、大里遺跡で縄文早期の押型文とともに木葉形尖頭器が2点出土しており、能勢町教委発行『大里遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(1999)に報告されている。

P区はO区の北80m離れて、また98年度調査におけるK区の南5m離れた位置に設定した調査区である。遺物としては地山直上面で摩滅した奈良時代の須恵器片、中世の瓦器片がわずかに出土した。遺構はなく、おそらく中世あるいはそれ以降に削平されて、水田あるいは畑として開発されたものであろう。

第10節　今回の調査のまとめ

今回調査し報告する倉垣遺跡の調査区は、H～J区およびL～P区の8調査区である。

当調査については、各時期ごとに簡単にまとめたい。

縄文時代

H区より早期の縄文式土器の出土を見た。小片で、また遺構に伴うものではない。この時期の遺跡は当町で5遺跡となった。

O区では同じく早期のものと考えられる有舌尖頭器が出土した。

弥生時代

I・J区において弥生時代前期末～中期前半の遺構・遺物がまとまって検出された。「前期末」としたが、研究者によっては中期初めに含められているものである。

竪穴式住居や方形周溝墓が多く発見され、生活域と墓域との様相がかなり明らかとなった。

竪穴式住居には柱穴が4本、5本、6本の三つの住居が同一場所で建て替えられているものがあった。同様の住居は96年度調査のハイ原でも発見されており、当遺跡の特徴かと思われる。

方形周溝墓は周溝が全周せずに所々で途切れるものである。主体部や盛土は後世に削平され、

残存していなかった。

弥生式土器は、Ⅰ・Ｊ区およびM区から多く出土した。基本的には摂津地域と同様の様相を呈するが、播磨か丹波の影響と見られるものが、一部にある。また管見において他地域では見られない土器もあり、当地域の独自性と考えられよう。

また籾跡のある土器や石包丁の存在は、当地域においても弥生時代から稲作が始まっていたことを示す。

石器では特筆すべきものとして、有柄の磨製石剣や石刀、チャート製の石斧、石包丁の未成品があげられる。

古墳時代

Ｈ区の大溝105からは、当地域最古の布留式土器がまとまって出土し、一括遺物として大いに注目されるものである。

またⅠ区の竪穴式住居3は、布留式土器が大量に出土し、須恵器登場以前の時期の一括遺物として、これも大いに注目されよう。

Ｊ区のP-35では、当地域最古の須恵器が出土した。この遺構も一括遺物を有するもので、当地域の歴史にとっては重要なものである。以上の三つの遺構からは、少ないながらも製塩土器が伴出している。山間地における製塩土器のあり方において注目されるべき事例となろう。

後期ではＨ・Ⅰ区で竪穴式住居や掘立柱建物がまとまって検出され、当時の集落の様相が明らかとなった。

Ｌ区では中期から後期にかけての自然地形の谷を2本検出した。布留式土器や須恵器などが出土している。また一つの谷では堰の跡が検出された。

飛鳥・奈良時代

Ｌ区で溝－19から飛鳥時代の遺物がまとまって出土した。

また同区のP-1で、奈良時代の終わり頃の土壙が検出され、完形の木器や須恵器坏蓋などがまとまって出土した。木器は刳り物の皿2枚と、蓋と身の曲物1セットである。

平安時代

Ⅰ区で平安時代の掘立柱建物群を検出した。出土遺物は少なかったが、当時の集落の一端を見せるものである。

M区とＬ区では緑釉陶器の出土を見た。当遺跡では他にＫ区からも出土しており、これで3点目となる。緑釉は大阪では官衙的性格の遺跡から出土するものとされているが、当地域では当倉垣遺跡と後述の坪ノ内遺跡を含めて19遺跡から出土していることが報告されており、また出土量も少なくない。当地域では緑釉は特殊なものでなく、普遍的なものと言えるだろう。

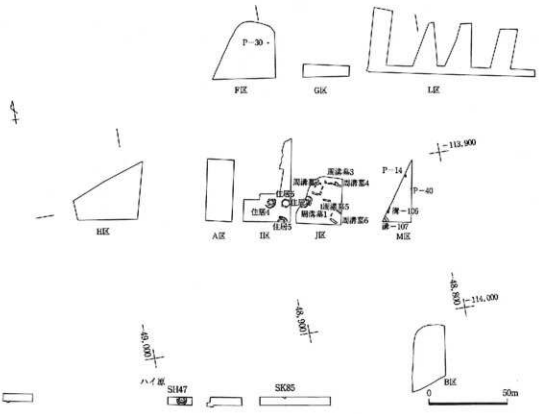
中世

中世の掘立柱建物群を検出したが、建物自体は離れて所在し、果たして集落と言えるものか疑問である。散村といった状況を考えることは可能であろう。

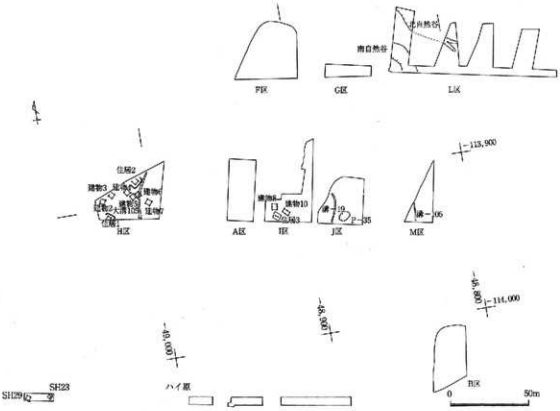
なおこれまでの本遺跡の調査成果をまとめるため、各時代ごとに主要遺構の位置図（第42図～第45図）作成した。また本書52頁において倉垣地区主要遺構一覧表も作成したので、合わせて参考にされるようお願いしたい。

倉垣遺跡本書報告分の各調査区の主要遺構一覧表

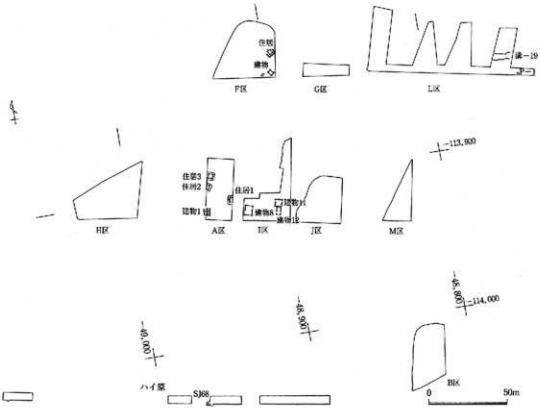
	H区	I区	J区	L区	M区
弥生時代前期末～中期前葉		P－52 竪穴式住居４～６	竪穴式住居７ 方形周溝墓１～６		
中期					P－14・40 溝－106・107
古墳時代前期	大溝105				
中期前葉		竪穴式住居３ 掘立柱建物10			
中期後葉			P－35	南・北自然谷	
後期	竪穴式住居１・２ 掘立柱建物２～７	掘立柱建物９	溝－70		
飛鳥時代				溝－19	
奈良時代				P－１	
平安時代		掘立柱建物８・11・12			
中世	掘立柱建物１	掘立柱建物13			方形区画溝 P－98・100



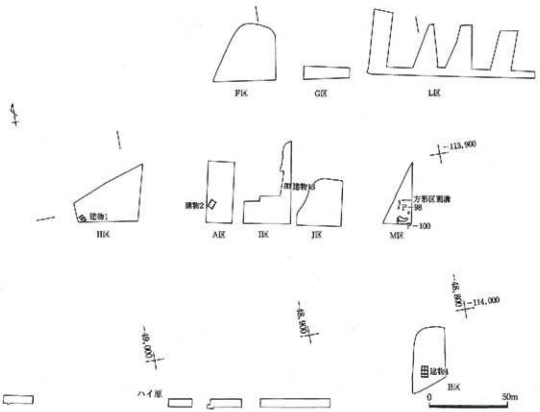
第42図　倉垣遺跡　弥生時代主要遺構位置図



第43図　倉垣遺跡　古墳時代主要遺構位置図



第44図　倉垣遺跡　飛鳥・奈良・平安時代主要遺構位置図



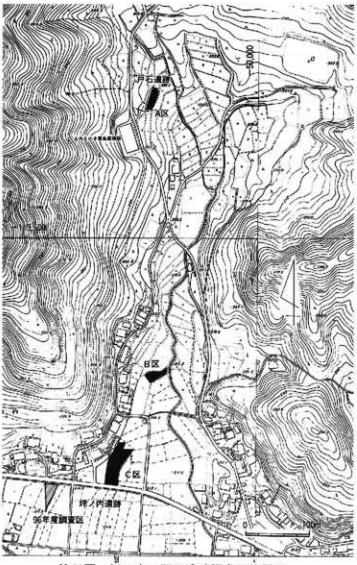
第45図　倉垣遺跡　中世主要遺構位置図

第3章　坪ノ内・戸石遺跡の調査

第1節　坪ノ内遺跡の調査

坪ノ内遺跡は95年度の試掘調査の際に発見され、翌96年度にその一部が発掘調査された。その成果は『歌垣第2地区発掘調査概要・Ⅱ』として、本府教育委員会より公刊されている。さらに98年度にこの近接地で試掘調査を実施したところ、遺跡の範囲が拡大することが判明した。そこで99年度に圃場整備にともなう発掘調査を実施した。

調査区は二ケ所設定し、北のものをB区、南のものをC区とした。この名付け方は発掘調査工事発注の都合によるもので、A区は後述する戸石遺跡である。



第46図　坪ノ内・戸石遺跡調査区位置図

B区

B区は山内地区の盆地平野から暮坂へ向かう谷の中にある調査区である。谷の入り口から150m入って、山内川の支流の谷川沿いにある。

調査区西半部に、径0.4～0.7m、深さ0.1～0.2mの小ピットを7つ検出した。これらは建物としては組み合わない。この周辺は地山に一抱え大の石が多く混じるが、水田開発等の時にこういった石を除去した際の抜け穴のピットという可能性がある。

C区

C区は山内から暮坂へ向かう谷の入り口にあり、B区より南へ100m離れ、また96年度調査区より東へ70m離れた位置に所在する。

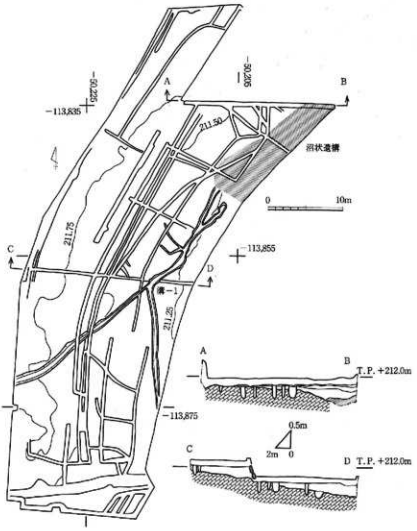
調査区内は周辺から水が集まる位置にある。水田耕作にも支障のあったようで、縦横に暗渠排水溝(いわゆる盲暗渠)を掘削して水はけを良くして、良好な水田として造成されたものである。この暗渠排水溝は近代になって掘削されたものと考えられる。

遺構としては溝を1条検出した。調査区南から北東に向かって、調査区中央で北にやや屈曲する溝である。その屈曲部で南東に向かう溝が枝分かれし、また北に向かう溝も途中で二又に分かれて終わる。調査区北東隅は掘削しなかったが、黒色粘土の沼状堆積物であるので、検出された溝

はこの沼状遺構に向かって流れるものと思われる。

溝は、南西部で幅1.1m、深さ0.4mで、遺構の壁が明瞭であり、人工的に掘削されたものと容易に考えることができる。しかし、北東部になると深さが0.1mで、遺構の壁も不明瞭となり、果たして人工的なものかどうか疑問となってくる。南西部の地山の高い所では人工的に掘削して、北東部の地山が低くて沼状遺構に通じる所では自然の流れるままにしておいた、と考えるのが妥当であろう。

当調査区の包含層からは、古墳時代から中世までの遺物が出土している。(429) は古墳時代の甕の体部。(430～432) は緑釉陶器。うち (432) は輪花である。(433～437) は平安時代の須恵器の碗あるいは坏の底部。



第47図　坪ノ内遺跡C区全体図

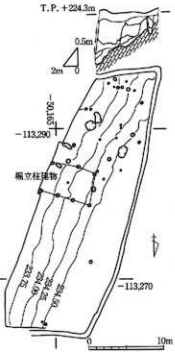
(438) は雷帯文がめぐる青磁碗。白磁 (440～442) のうち (442) は内面底に猫描き。瀬戸 (443、444)、丹波 (445)、東播系 (446)、瓦器碗 (447～449)、土師器小皿 (450)。(451、452) はいわゆる播磨鍋。(453) は土師質の壺で、一応中世のものとした。(454) は土師質の羽釜。

第2節　戸石遺跡の調査

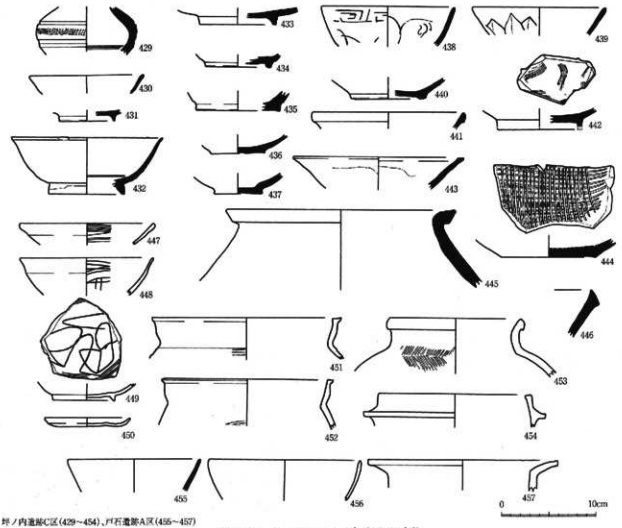
戸石遺跡A区は、坪ノ内遺跡B区より北へ400m離れた位置に設定した調査区である。ここから北へは宿野に通じる暮坂峠、東へは倉垣地区和田へ通じる篠口峠に向かう地点である。この付近は谷の奥まった所であるが、急なものではなく、水田が広がっている。

調査区内の中央～南半部で小ピット群が検出された。うち建物として組み合うものは中央部にある。この掘立柱建物の規模は、東西3間 (7.2m) ×南北2間 (4.5m) である。ただし建物の北辺と西辺は明白であるのに対して、南辺の柱穴列は直線には並ばず、また等間隔ではない。東辺は調査区外となる。柱穴は径0.4～0.7m、深さ0.2mで、他のピット群と比べて深く、また遺構としても明瞭であった。

当遺跡からは遺構からの遺物は少なく、ほとんどが地山面直上の整地土層からの出土で、すべて細片あった。図化しえたものとして須恵器の坏（455）、瓦器碗（456）、土師器甕（457）がある。他に奈良時代後半と思われる製塩土器の細片が2点出土した。製塩土器の出土遺跡は、旧能勢郡内においては11遺跡目となる。



第48図　戸石遺跡A区全体



坪ノ内遺跡C区（429～454）、戸石遺跡A区（455～457）

第49図　坪ノ内・戸石遺跡出土遺物

第4章　これまでの調査のまとめ

農村総合整備事業「歌垣地区」「歌垣第2地区」に伴う遺跡の発掘調査は、本概要報告分で終了した。この事業の対象となった地域は、昭和31年（1956）の合併による能勢町成立までの行政単位であった旧歌垣村の吉野・倉垣・山内の3地区で、それぞれで過去において実施された発掘調査の公刊された報告書は、下記の通り（一部重複）である。

倉垣地区

『地黄北山遺跡・横町遺跡発掘調査概報』（能勢町教委　1980）
『歌垣第2地区発掘調査概要・Ⅱ』（大阪府教委　1997）
『倉垣遺跡発掘調査概要』（大阪府教委　1998）
『原田遺跡発掘調査報告書』（能勢町教委　1998）
『倉垣遺跡（E区等）発掘調査概要』（大阪府教委　1999）

山内地区（上田尻を含む）

『節・香・仙　第41号』（大阪府教委　1985）
『二ノ院遺跡発掘調査報告』（能勢町教委　1986）
『円山古墳群発掘調査概要』（大阪府教委　1991）
『山内池尻・畑垣内遺跡発掘調査概要』（大阪府教委　1996）
『歌垣第2地区発掘調査概要・Ⅱ』（大阪府教委　1997）

吉野地区

『吉野遺跡発掘調査概要』（大阪府教委　1993）
『吉野遺跡発掘調査概要』（大阪府教委　1994）
『吉野遺跡発掘調査概要・Ⅲ』（大阪府教委　1995）
『吉野関遺跡発掘調査概要』（大阪府教委　1996）
『能勢町埋蔵文化財調査概要』（能勢町教委　1996）
『原田遺跡発掘調査報告書』（能勢町教委　1998）

以上の地区では、今後当分の間は遺跡発掘調査の予定がなく、今回で一段落することになった。従ってこれまでの調査のまとめが必要と考えられるが、時間的制約もあり、各地区ごとに調査地点位置図と主要遺構の時期別一覧表を呈示するにとどめた。なお倉垣遺跡については46・47頁で各時代別の主要遺構位置図を作成しているので、合わせて参考にされたい。

第１表　倉垣地区主要遺構時期別一覧表

	倉垣遺跡					原田遺跡	横町遺跡	地黄北山遺跡
	A・B区	F区	H・I・J区	L・M・O区	ハイ原			
縄文時代			○	○				○
弥生時代前期～中期前葉		P－30	P－62 竪穴式住居４～７ 方形周溝墓１～６		SK85		○	
中期				P－14・40 溝－106・107	SH47	方形周溝墓１～４	○	○
後期					○	方形周溝墓５	製鉄炉（？）	竪穴式住居跡
古墳時代前期			大溝105					
中期前葉			竪穴式住居３ 掘立柱建物10					
中期後葉			P－35	南・北自然谷				
後期			竪穴式住居１・２ 掘立柱建物２～７・９ 溝－70		SH23・29	岡崎４号墳		
飛鳥時代	竪穴式住居１～３ 掘立柱建物１	竪穴式住居 掘立柱建物		溝－19				
奈良時代				P－１		古墓		
平安時代			掘立柱建物８・11・12		SJ68			
中世	掘立柱建物３ 掘立柱建物４		掘立柱建物１・13	方形区画溝 P－98・100		火葬跡		

第50図　倉垣地区の既往の調査

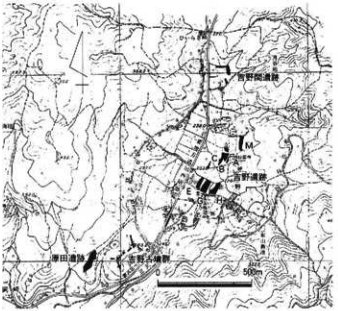
第２表　山内地区主要遺構時期別一覧表

	坪ノ内遺跡 戸石遺跡	畑垣内遺跡 山内池尻遺跡	唐竹遺跡	阪尻遺跡	稲荷社遺跡 二ノ院遺跡	円山古墳群 幕坂古墳群
弥生時代					小土壙群 (稲荷社)	
古墳時代前期			ＳＨ200・ＳＤ205 土坑群	ＳＤ2 ＳＤ1		
後期	溝(坪ノ内)	ＳＸ185(畑垣内)				幕坂古墳
飛鳥時代						円山１～３号墳
平安時代			ＳＤ374～376			
中世	掘立柱建物 (戸石)	建物１・土坑群 (山内池尻)			溜池状遺構 (二ノ院)	

第51図　山内地区の既往の調査（黒塗りが発掘調査済み）

第３表　吉野地区主要遺構時期別一覧表

	吉野遺跡		吉野関遺跡	吉野古墳群
	A～C区	E・G・H・M区		
古墳時代中期（５世紀）				吉野２号墳 浜湯場古墳
平安時代前葉	SD１・２ SK１			
中世(13世紀)			建物１・２ 集石遺構	
(14世紀)		掘立柱建物群９棟・屋内炉 銭甕・大量埋蔵銭		



第52図　吉野地区の既往の調査（原田遺跡は倉垣地区）

第5章　ガマの調査

第1節　ガマの概要

1. 棚田とガマ

能勢町長谷地区は、町内の南西端に位置し、周囲を険しい山並で取り囲まれ、中央を東流する長谷川に沿ってわずかに平坦地がある。水田のほとんどは山腹の急峻な谷に広がり、棚田として他とは違った独特の景観を呈している。

この棚田には「ガマ」と呼ばれる特異な水利施設の存在が、以前より知られていた。これは、山腹を流れる水脈に石組みを構築するもので、その上に盛土して水田をつくり、棚田を造成している。この石組みは横穴式で、棚田の各所の石垣擁壁にその入り口を見ることができる。この横穴式の石組みが「ガマ」と称される。そして棚田は、このガマを利用して灌漑を行なっているのである。

棚田は前述したように山腹の谷に広がる。ガマの分布する谷は、山田の谷、宮の谷、中西、溝谷、土井谷の五つで、これらの谷に造成された棚田にガマが構築されている。1984年度の調査では、棚田の総面積17.4haに217ケ所のガマが確認されている。

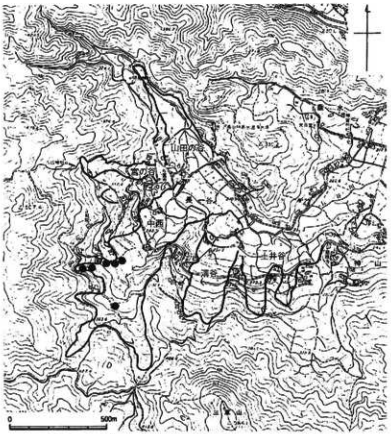
その中でも分布密度の高い谷は中西と宮ノ谷である。中西では比高差172m、平均勾配1／5.8、面積5haの棚田に140ケ所のガマがある。また宮ノ谷では比高差98m、平均勾配1／4.3、面積0.4haの棚田に21ケ所のガマがある。

ガマは棚田の灌漑だけでなく、洪水調節機能も合わせ持つ。すなわち大雨の時にこのガマに水を集めて素早く下に流し去るのである。ガマは急峻な棚田が長年にわたって崩れることなく維持されてきた大きな要因の一つとなっている。

2. ガマの構造

最も標準的で典型的なガマの構造を模式的に図化したものが第54図である。

ガマは落とし口、水溝（横穴式の暗渠）、ガマ口で構成される。上の落とし口に入った水は、水田下の水溝を通ってガマ口に出て、次に下段のガマの落とし口に入って水溝→

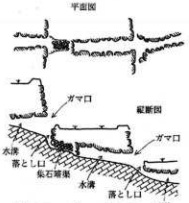


第53図　ガマの分布する谷と調査したガマの位置図

ガマロと繰り返しながら連続して流れる。落としロをベニヤ板もしくは土嚢で塞ぐと、水田に水を供給することができる。

これは標準的・典型的な例であって、すべてのガマがこうであるわけではない。落とし口の不明なもの、水が流れないで機能を失ったもの、ガマ口を土管に置き換えたもの、ガマ全体が改修されてヒューム管に替わっているものなどがある。

また落とし口と水溝の最奥部とは離れている場合が多く、その間は集石暗渠（いわゆる盲暗渠）となっていたり、単なる集石であったり、時には近年に改修されてパイプ管が敷設されていることもある。



第54図　ガマの模式図

ガマに利用される石は長谷地区に多い自然の転石である。ガマは人が動かせる程度の転石を集めて組み上げ、構築されたものである。

なお転石でも巨大なものは棚田の水田面に露頭することがあり、人力で除去できないので耕作の支障となっている。

3. 既往の調査

ガマの最初で本格的な研究は、鳥越憲三郎氏によるものである。主に文献資料や民俗学的な観点からの研究であるが、ガマそのものの実測調査も行なっており、総合的な研究と言える。その成果は註1の文献で発表されている。ガマの評価については、この研究の発表後は基本的にその見解に負っていると言っても過言ではない。

ガマはその文化遺産としての重要性から、1984年度に大阪府農林水産部北摂耕地事務所池田分室が分布調査を実施した。また1989年度にガマの構造を知るために同分室が本府教育委員会文化財保護課の協力を得て、宮ノ谷№8のガマの発掘調査を実施した。以上の調査成果は、内部資料として外部には公表されなかったが、後に註2、註3の文献のなかでそれぞれ公表されている。

1991年度になって長谷では圃場整備事業が計画され、ガマが影響を受けることとなった。そのため同事業に先立ち発掘調査を実施することになり、山田の谷№4、5、8のガマが調査された。註2の文献にその概要が報告されている。

4. ガマの時期

ガマがいつ頃構築されたかについては、鳥越氏によれば、

「水田排水溝、何時の時代につくられたかについては、文献の上からも、また口碑としても明らかではない。しかし、ガマをもつ耕地がすべて文禄検地帳に記載されており、耕地を設定してから後に構築されたものではないところから推して、少なくとも文禄以前につくられたものだということだけは断定できる」

「ガマのある所はすべて文禄古検の耕地に限られている。ガマの構築が耕地をつくって後につくられたものでないことから考えて、ガマは文禄以前に構築されていたものと見てもよかろう。文書によるガマの考証は、文禄以前に遡ることを得ないが、その起源はそれよりも更に古く、相当

早くからこの地に発生したものであることだけは推測できる。」[注1]

と、文禄三年（1594年）の太閤検地以前のものと推論されている。

1990年2月に実施された宮ノ谷のガマの調査では、江戸時代前半かと考えられる伊万里焼の破片の出土が報告されている。報告者は「これがガマ構築の時期を示すかどうかは、にわかに決め難いが、ガマが相当古い歴史をもつ事は確実である。」[注2]と慎重である。

1991年の山田の谷のガマの調査では、

「上段集石部分の掘り込み部分は鎌倉時代の遺物包含層（瓦器、土師器、白磁等が出土）を掘り込んだものであり、また、掘り込み面上層からは近世の陶磁器片が出土する事から、構築時期がある程度限定できる。」

「今回の調査によると、鎌倉時代まで遡らせることは不可能であるが、少なくとも室町時代の範囲内に絞りこむことは可能である。」[注3]

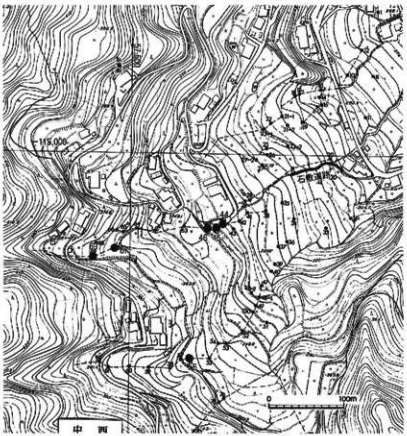
と報告されている。

ところで、棚田の擁壁である石垣は、水田と水田との間をほぼ垂直の段差とすることによって、水田面積を広げることになり、収穫量の増大につながるものである。ガマも石垣も同様に石を組むものであるから、一体として構築して棚田を造成したものと考えることは可能である。石井進氏は、全国的に棚田を概観して、

「戦国・織豊時代、全国に急速に広まった石垣造りの築城法に伴い飛躍的進歩をとげた石垣積みの技術が、『徳川の平和』と一国一城令の影響で軍事技術から生産・産業技術に転換したことが、石垣の畦が普及した背景にあったと考えれば、その時期はいくら早くともやはり江戸時代に入って以後となろう。」[注4]

と論述されている。この見解を取り入れるならば、ガマは中世ではなく近世に入ってから構築されたことが考えられる。

ガマの時期については、更なる調査と研究が望まれるところである。



第55図　中西のガマ分布図と調査したガマ（黒丸）

註1、大阪府教育委員会『摂津西能勢のガマの研究』大阪府文化財報告第7輯　1958年

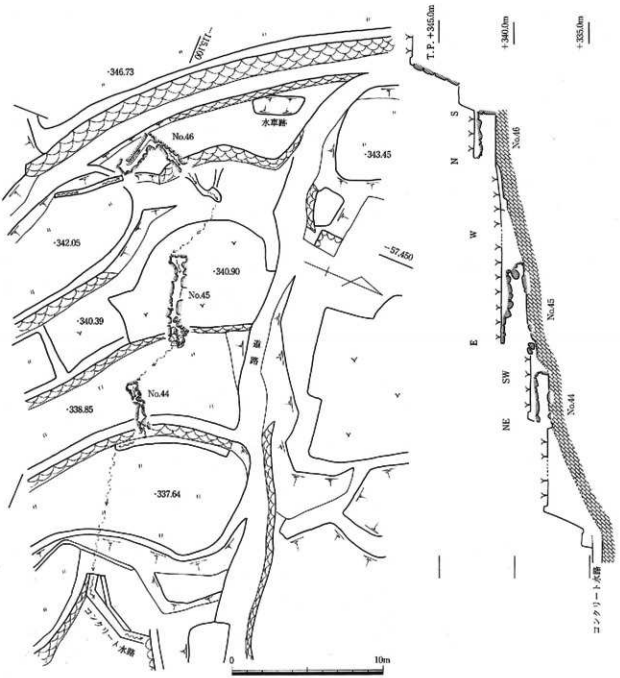
註2、大阪府教育委員会『岐尼地区遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』1992年

註3、大阪府教育委員会『岐尼地区遺跡群発掘調査概要・Ⅲ』1993年

註4、石井進「棚田への招待」（第一法規『月刊文化財　平成9年1月』所収）

第2節　ガマの調査

中西は長谷地区において美しい棚田景観を有する谷の一つで、またガマの密度が高い。ここの棚田は、面積が約5ha、水田の標高が412mから240mまでの比高差172mに広がる。最高地点と最低地点の水平距離が約1ｋｍであるので、平均勾配は1／5.8となる。この棚田に140ケ所のガマが分布する。



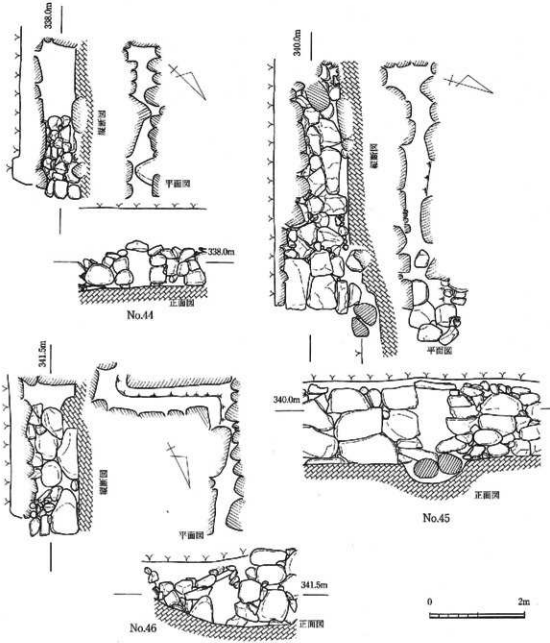
第56図　№44・45・46のガマの位置図と縦断図

今回調査したガマは、この中西に所在する。標高340m前後にあるNo.44・45・46と、標高365m前後にあるNo.67・69、標高360mにあるNo.56の6ケ所のガマである。そのうちNo.44～46の三つは連続するもので、模式図に近い形状を観察することができた。

No.44のガマ

このガマは今回調査したなかでは最も低い地点にあり、標高338.9mの水田の下に構築されている。ガマロの大きさは、高さ0.7m、幅0.4m、ガマロから奥壁までの奥行きの長さは3.1mを測る。側壁の石は、0.2～0.4m大の自然石を面をそろえるものではなく、乱雑に積み上げている。しかしガマロの石は0.3～0.4m大の自然石で、側壁のものより大きく、また面をそろえて積み上げている。天井石は6枚で、0.3m大から1m大までの様々な大きさがある。

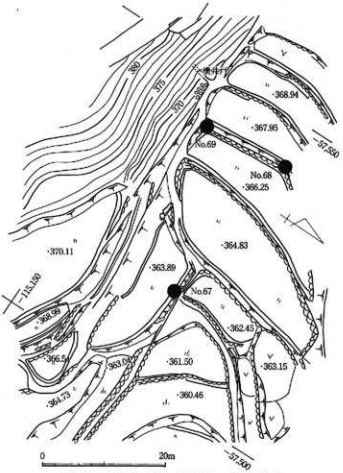
水溝の底は石を敷き並べるのではなく、土砂がそのまま底となる。大きな自然石が底にはみだ



第57図　No.44・45・46ガマの実測図

すために、水の流れが部分的に蛇行する。この自然石はこの地区でよく見かける転石で、動かすことができないために、そのままガマのうちに取り込んだものである。

このガマの落とし口は、一つ上段にあるNo.45のガマ口の直下にある。ここから4m離れて奥壁となるが、この間は発掘調査していないので不明である。これまでの調査例から、集石暗渠（いわゆる盲暗渠）だろうと思われる。水は集石暗渠から奥壁に至り、さらに水溝部を通ってガマ口に出て、石垣に沿って掘削された幅0.2m程の溝を2m走って、次の落とし口に入って下段へいく。しかし下段ではコンクリート水路に繋がっており、ガマとは認識されていないものである。

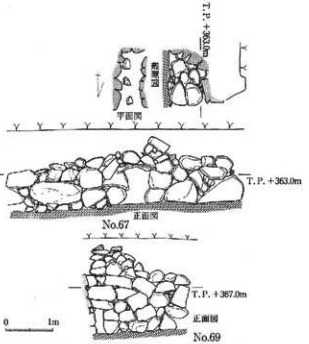


第58図　No.67・68・69のガマの位置図

No.45のガマ

No.44のガマより一つ上段に所在し、標高340.9mの畑の下に構築されている。ガマ口は、高さ1.4m、幅0.6m、内部の奥行きは5.2mを測り、ガマとしては最大級の大きさである。水溝部は、ガマ口から1.5m入った所から奥が高さ0.9m、幅0.3～0.5mと狭くなる。さらに奥へ3m入った地点で天井石が垂れ下がったまま安定しているが、ここでは高さは0.2mもない。さらに最奥部では高さ0.4mとなり、広さも若干広くなる。

ガマ口の石は0.4～1.0m大のものを面をそろえて積み上げている。正面左側最上段のものは、ヤ穴の痕跡があり、人工的に割って整形したものであることが分かる。側壁・天井石含めてガマを構成する石のうち人工的なものはこれだけで、他はすべてこの地区でよく見られる転石である。側壁は、ガマ口から1.5mまでは面をそろえるが、それより奥では面をそろえることもなく積み上



第59図　No.67・69のガマの実測図

げており、乱雑な様相を呈する。

このガマの落とし口は、奥壁から西へ4m、一つ上のNo.46のガマロより北へ3mの位置にある。落とし口と奥壁の間は、おそらく集石暗渠であろう。落とし口に入った水は集石暗渠を通って奥壁に行き、さらに水溝を通ってガマロに出る。このガマロの直下が、下段のNo.44のガマへの落とし口となる。

No.46のガマ

No.45より一つ上段に所在し、標高342.7mの畑の下に構築されている。ただし畑は耕作が放棄され、荒れた状態である。

ガマロは高さ0.9m、幅0.5mである。水溝部はガマロから2.8m入った所で左へ90度に曲がり、さらに2.5m行った所で、今度は右に90度に曲って0.5mの地点で奥壁となる。このような複雑な形状を呈するのは、幅2.2m、高さ1m以上の大きな一枚岩が動かせないために、この岩に沿って水溝部を設けたためである。

ガマロの天井部は土管が横たわっており、この部分が近年に改修されたことを示す。水溝部は、前述の一枚岩を除くと、0.2～1.1m大の自然石で積み上げられており、面をそろえるものはない。

落とし口は、奥壁の直上から東に接した位置で、幅0.3mの水路の終点がそれとなる。この水路は、さらに上段のNo.63のガマにつながるものとされている。

落とし口から落ちた水は、水溝部の奥壁からジグザグに曲りながらガマロに出て、そのまま北へ幅0.3m、長さ3mの水路を流れる。この水路の一部はパイプを通っており、パイプの出口の直下がNo.45への落とし口となる。

No.67のガマ

No.46より西へ約110m上った地点に所在する。前述のNo.44～46とは同一の水脈になる。

標高363.9mの水田の下に構築されるもので、ガマロは高さ0.8m、幅0.5m、内部の奥行きは1.2mを測る。側壁、天井ともに0.2～0.5m大の自然石で組み上げられている。奥壁は内に向かって持ち送りとなっており、天井との境がはっきりしない。ガマロの側壁の石だけが面をそろえており、またその天井部には厚さ0.1mの薄い板状の石を使っている。

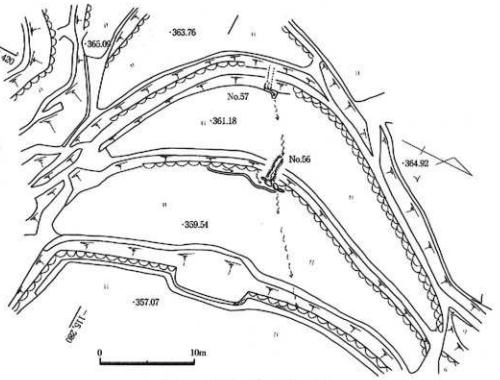
このガマを流れる水はその南の山筋から集めたものと思われるが、落とし口が見当たらない。水溝を通ってガマロに出た水は、石垣沿いの水路を二手に分かれて流れる。そして次のガマへ行くはずであるが、調査時には雑草が繁茂する民有地のため、確認できなかった。

なお後述のNo.69のガマからの水は、このガマを通らずに別ルートの暗渠を流れる。従ってNo.67とNo.69は系統の違うガマであることが確認できた。

No.69のガマ

No.67より西へ27m上がった地点に所在する。標高367.9mの水田の南端の下に構築されている。ガマロは高さ0.5m、幅0.2mで、身体を入れることは不可能である。内部は0.5mまでは確認できるが、それ以上は不明である。ガマとしては小規模なものである。

このガマから石垣沿いに北へ13mの位置に、No.68のガマがある。今回予定されている農道建設には影響がなく、調査の対象とはしなかった。水は流れておらず、機能を失ったガマである。



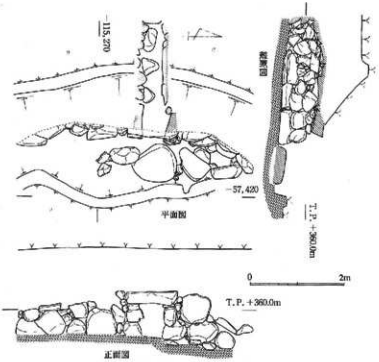
第60図　No.56のガマの位置図

No.56のガマ

No.46より南へ約170m離れた位置にある。前述のNo.44～46、67、69のガマとは、中西のなかでも谷が異なり、従って系統が別のものである。

標高361.2mの水田の下に構築されるもので、ガマロは高さ0.7m、幅0.5m、奥行きは2.4mを測る。ガマロの石は0.5～0.7m大の石を面をそろえて積み上げ、その天井には1.1m大の平らな石を使っている。内部の側壁や天井の石は0.2～0.7m大の自然石で、面をそろえることなく乱雑に積んでいる。

このガマの落とし口は、一つ上段のNo.57のガマ口の直下にある。落とし口から奥壁までは約6.5m離れており、この間は盲暗渠であろう。本来の水脈は、ここを通って奥壁に至り、さらに水溝を流れてガマロを出るのであるが、一部水脈が南に分かれて通じてしまっているようで、ガマロから南へ1.0mと5.0mの地点からも、石垣の隙間から水



第61図　No.56のガマの実測図

が流れ出している。これらの水はガマロで一つにまとまり、北へ約1mの地点で下段への落とし口に流れる。なお下段にはガマはなく、水は石垣の隙間から流れ出て、石垣沿いの水路を南へ流れていく。

石敷道路

長谷地区を周回する旧バス通りから民家の裏をまわって中西の谷の中央を登る道は、かつての主要道路であった。幅1m程の石敷道路であるが、今は一部に石敷が残存しているに過ぎない。昭和30年代に各民家に通じる町道が建設されるまでは、この石敷道路が唯一の道と言ってよかった。従ってそれまでは自動車が家に横付けできなかったので、大きな荷物や資材は、人が担ぐか牛の背に載せて、この道を運ぶしかなかったものであった。病院で亡くなった家族を戸板に載せて数人がかりで家に運んだのもこの道だし、家の屋根の葺き替えの時、牛の背中に瓦を載せて三日かかって運んだのもこの道であった、とのことであった。地元の人たちは、ガマよりも石敷道路の方に愛着を持っておられるようであった。

今回の農道建設工事において、この道路は農道下に埋めてしまう計画であり、従って半永久的に見ることができなくなるものである。文化財とすべきものかどうか疑問はあるが、写真だけの記録にとどめ、本書に掲載した。

横井戸

長谷地区では各家で使用する井戸は、縦方向に掘削した一般的な井戸ではなく、山腹を横方向に掘削して水脈をあてて水を引き込む横井戸が多く見られる。それは現在はほとんど機能していないようであるが、地区内の各所に残存している。

これについては鳥越氏は、前述の註1の文献のなかで次のように論じている。

「長谷の部落は、地質的には石英閃緑岩から成っている。‥‥石英閃緑岩は風化し易く、そのため地層の上層はかなり深く風化作用を受けて、砂質層を呈している。粘土層をもたないために、降雨を受けると、水は容易に砂質層に吸収されて岩盤に達し、岩盤に沿って流れる。‥‥ここではいわゆる掘井戸というものがない。俗に『横穴』と名付け、地表から水平に山腹の岩盤に向けて横穴が掘られる。そして水の流れている岩盤のところの水源まで、奥深く穴が穿たれるのである。」

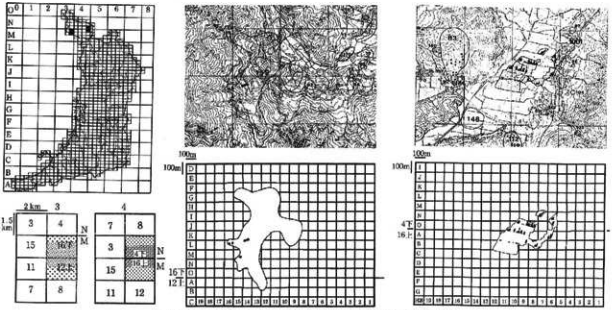
今回調査したNo.69のガマの西に、このような横井戸の一つがある。地元の人によると、これは戦前に掘られたものとされる。しかし長谷地区ではこういった横井戸がいつ頃から掘られはじめたのかについては、いま一つ判然としない。調査はせず、また記録もしなかったが、大阪では他に例を聞かないものなので、ここに報告しておく。

報告書抄録

ふりがな	くらがさいっせき・ながたにのガマとうはっくつちょうさがいよう
書名	倉垣遺跡・長谷のガマ等発掘調査概要
副書名	農村総合整備事業「歌垣第2地区」等に伴う調査・Ⅳ
編著者名	辻本武
編集機関	大阪府教育委員会文化財保護課
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　℡06－6941－0351（代表）
発行年月日	2000年3月

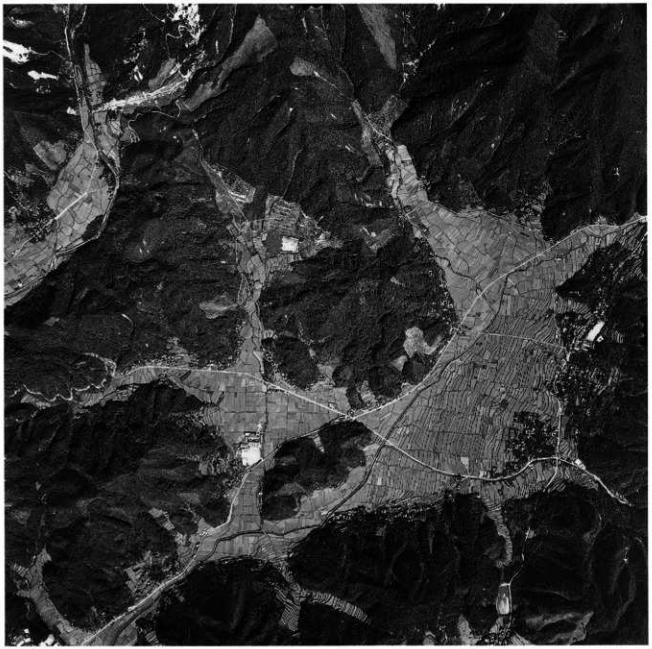
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
くらがさいっせき	おおさかふとよのぐん	27322						
倉垣遺跡	大阪府豊能郡			34°	135°	1998年6月～	3364m²	圃場整備
	のせちょうくらがさもない			58′	27′	11月		
	能勢町倉垣地内			17″	50″	1999年11月～	2590m²	圃場整備
						翌00年3月		
つぼのうちういしいせき	のせちょうやまぢもない			34°	135°	1999年7月～		
坪ノ内・戸石遺跡	能勢町山内地内			58′	26′	10月	2004m²	圃場整備
				19″	56″			
ガマ	のせちょうながたにうない			34°	135°	1998年2月～		
	能勢町長谷地内			57′	22′	6月	60m²	農道建設
				39″	20″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
倉垣遺跡		縄文時代早期		押型文、有舌尖頭器	
	集落跡	弥生時代前～中期	竪穴式住居群と方形周溝墓群	壺、甕、磨製石剣、石刀、石包丁	墓域と住居域
		古墳時代前期	大溝、竪穴式住居	壺、甕、高杯、製塩土器等	当地域最古の布留式土器
		古墳時代中期	土壙	須恵器、土師器、製塩土器等	※地域最古の須恵器
		古墳時代後期	竪穴式住居群	須恵器等	
		奈良・平安時代	掘立柱建物群	黒色土器、緑釉、瓷形の木器皿等	
		中世	ピット群	瓦器、土師器等	
坪ノ内・戸石遺跡	集落跡	古代・中世	掘立柱建物、溝	製塩土器、緑釉陶器、瓦器	
ガマ	農業生産関係	中世	横穴式の水路		畑田に伴う水利施設



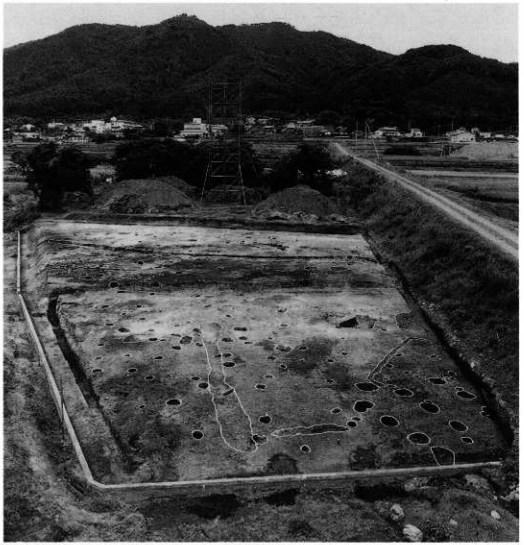
長谷のガマ（左）と倉垣遺跡（右）の範囲と調査位置

図　　版



歌垣第2地区空中写真（1967年撮影）

H区全景と
歌垣山（西から）



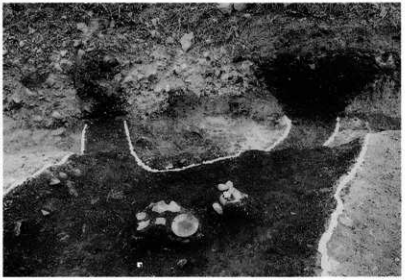
H区全景（東から）

H区空中写真

H区東半部（北から）

大溝105（南から）

大溝105断面



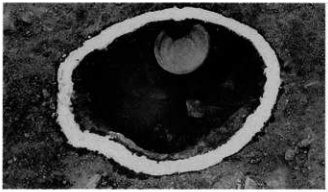
大溝105南側断面（北から）

大溝105内の壺（2）出土状況

大溝105内の甕（9）出土状況

大溝105検出当初

大溝105の壺（1）と鉢（10）出土状況



P－69

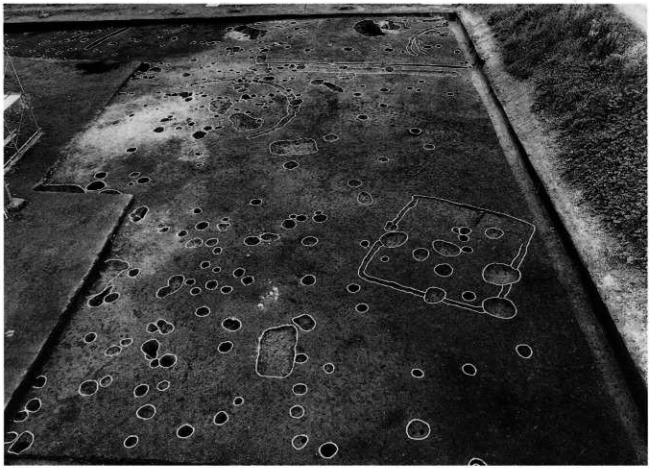
P－244

竪穴式住居1（南から）

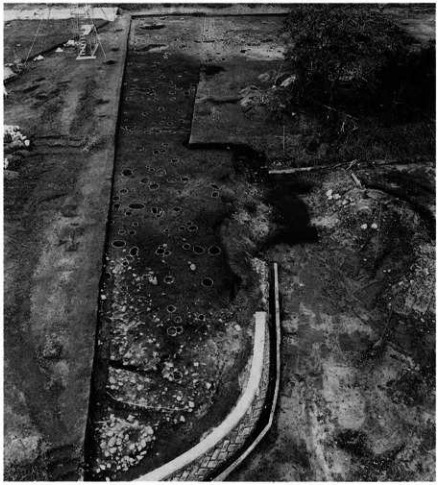
竪穴式住居2（北から）

Ⅰ・J区全景
（東から）

Ⅰ・J区垂直写真



Ⅰ区南半部（西から）

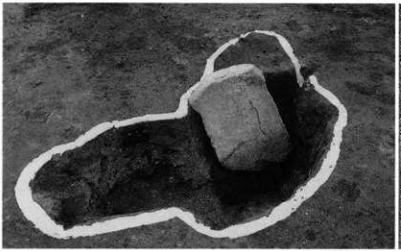


Ⅰ区北半部（北から）

Ⅰ区南半部（北から）

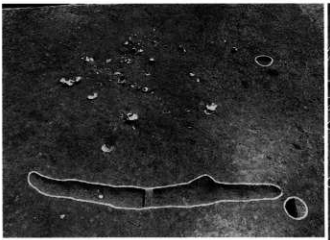
P－52

P－52内の弥生式土器

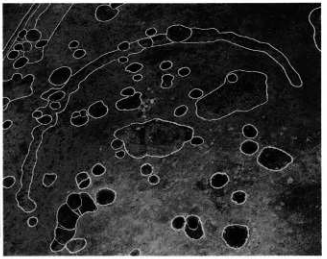


P－197

磨製石剣出土状況



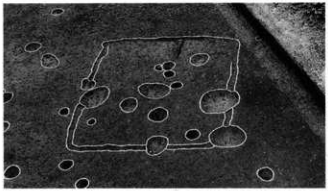
竪穴式住居３の土器群（上層）



竪穴式住居４（北から）

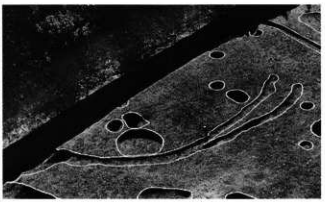
同上（下層）

竪穴式住居４と５（東から）



竪穴式住居３全景（西から）

竪穴式住居３内のＰ－84

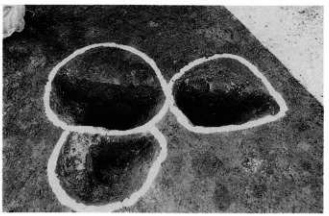


竪穴式住居６（北東から）

P－186

P－24

P－164



P－168，169

P－171

P－145

P－59

P－60

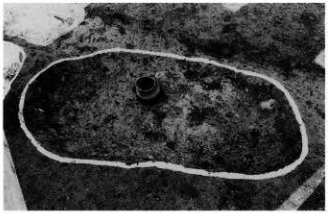
図版九　J区全景と竪穴式住居等

J区全景（北から）

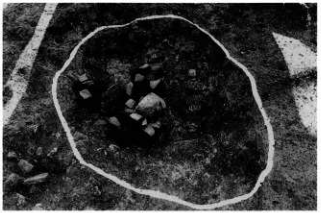
竪穴式住居7と方形周溝墓1（西から）

P－93

P－2



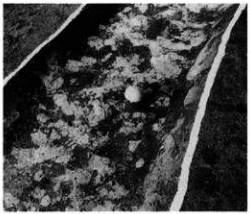
P－59



P－6

P－35の断面

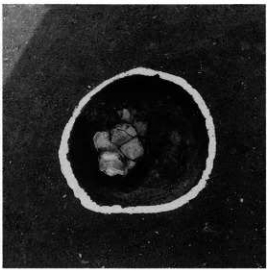
P－35の土器出土状況



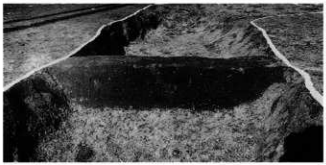
溝－70内の須恵器

中世の石組（北西から）

方形周溝墓6（北東から）



P－122



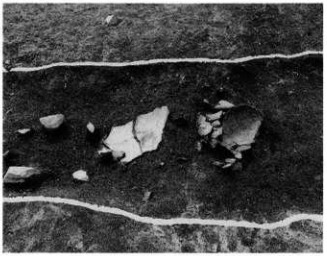
溝－40断面

竪穴式住居7内の石包丁

溝－32断面

竪穴式住居7と方形周溝墓1の断面

溝－19（東から）



溝－1

図版十一　L区・M区空中の写真

L－1・2区

L－3・4区

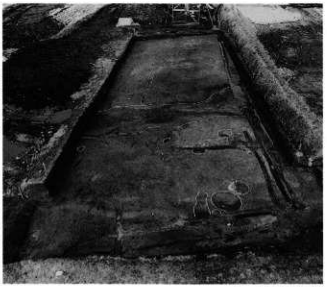
M区

図版十三　L区・M区全景

L－1区（南から）

L－2区（南から）

L－3区（南から）



L－4区（南から）

L－3・4区（南から）

M区（南西から）

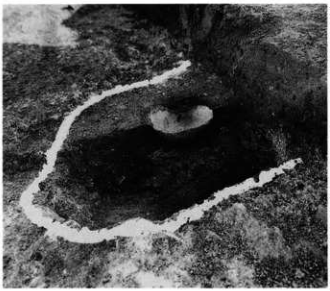
図版十四　L・M区の各遺構

L区南自然谷の堰

L区南自然谷の土器出土状況

L区P－1遺物出土状況

L区P－1木器



M区P－40

M区溝－106

倉垣遺跡M区P－100（東から）

倉垣遺跡O区（南から）

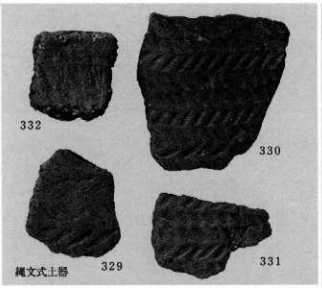
坪ノ内遺跡C区北半部（北から）

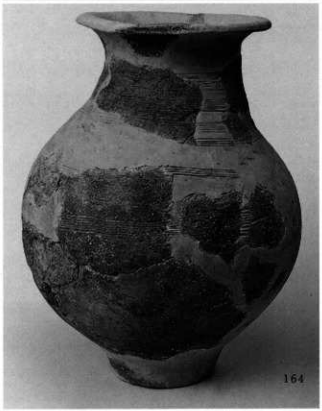
坪ノ内遺跡C区南半部（北から）

坪ノ内遺跡B区（西から）

戸石遺跡A区（南から）

図版十六　H～J区出土縄文・弥生式土器



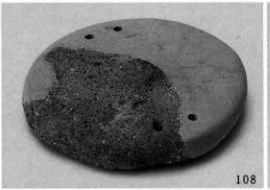


図版十七　H・I区出土弥生式土器(1)

142

152

232

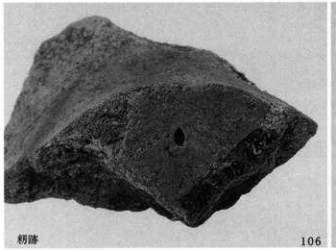

108

169

49

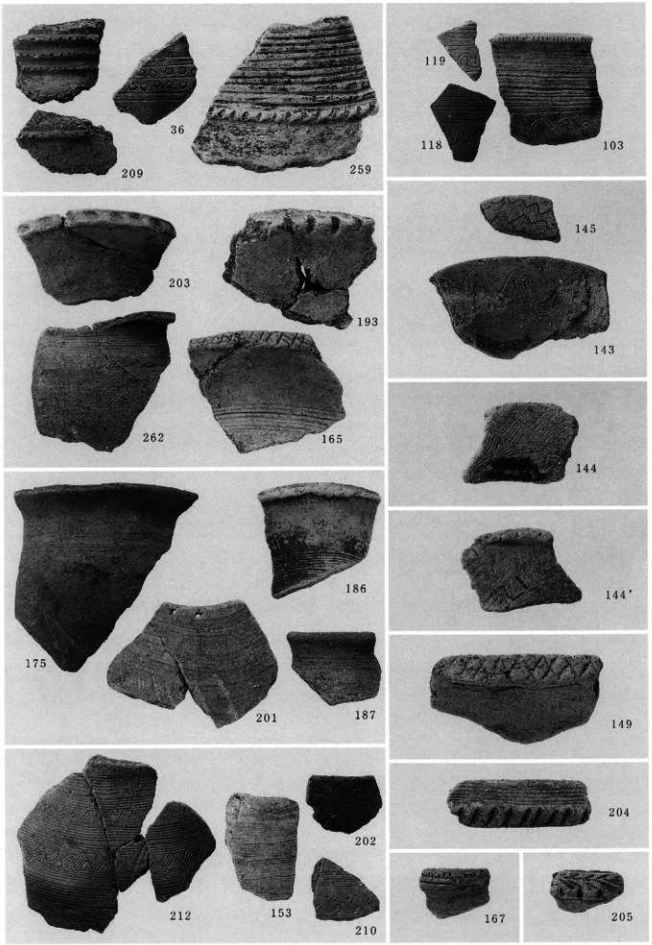
231

230

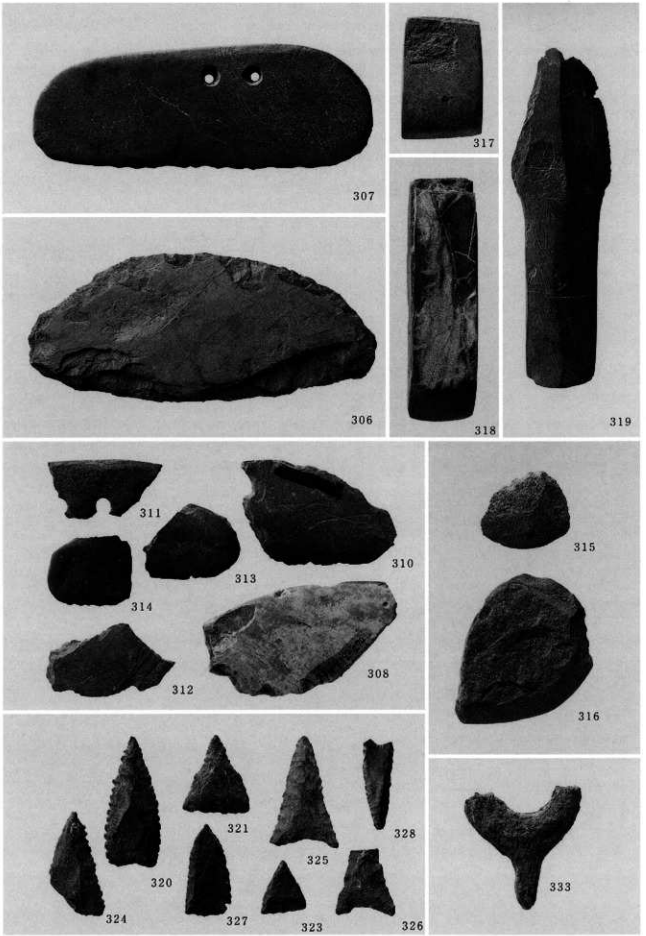


106

158


209
36
259
203
193
262
165
175
186
201
187
212
153
202
210
119
118
103
145
143
144
144'
149
204
167
205

図版十九　I・J区出土石器



大溝105出土遺物一括

1

2

9

6

7

17

12

13

14

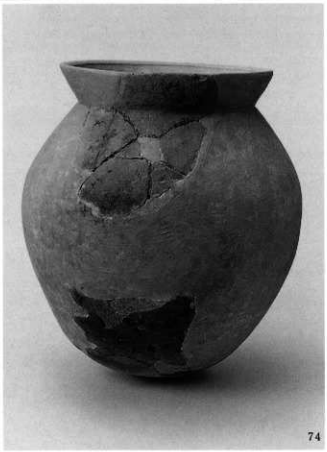
10

16

18

竪穴式住居3出土遺物一括

73



74

75

79

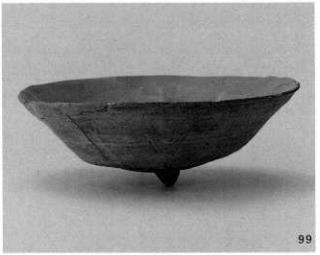
78

80

82

83

84


99

87

92

94

95

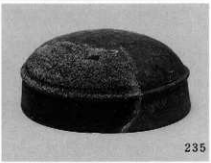
96

97

P-35出土遺物一括

233

234



235

240

258

242

248

256

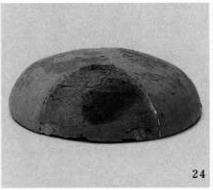
243

図版二六　H－I区出土須恵器

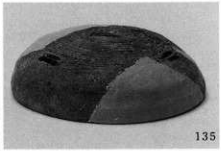
26

134

133


24

136


135

272

28

268

270

284

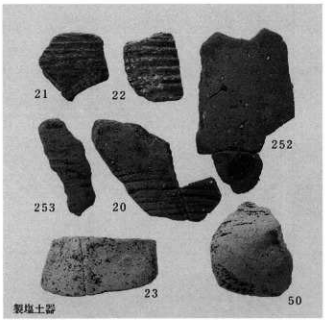
286

27

275

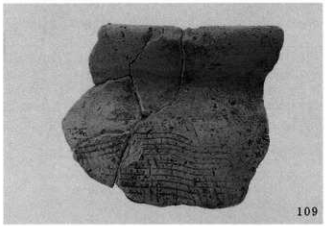
274

276

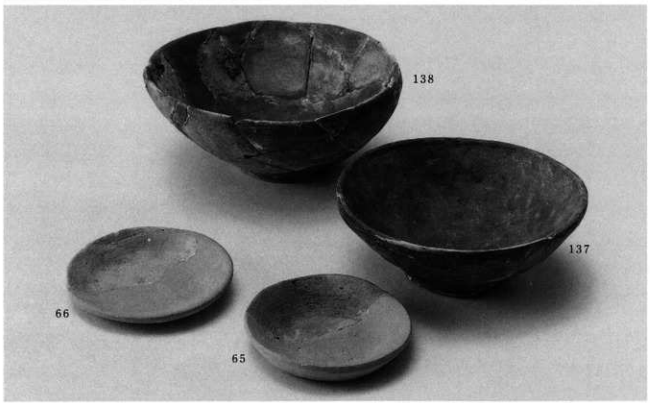

21
22
252
253
20
23
50
製塩土器

63

293

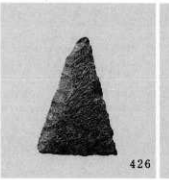

109

113


138
137
66
65

有舌尖頭器　428

石刀　422


426

427

381

363

383

384

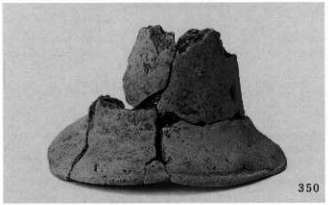
385

338

339

348

355


350

405

342

343

344

341

緑釉　358

緑釉　432

373

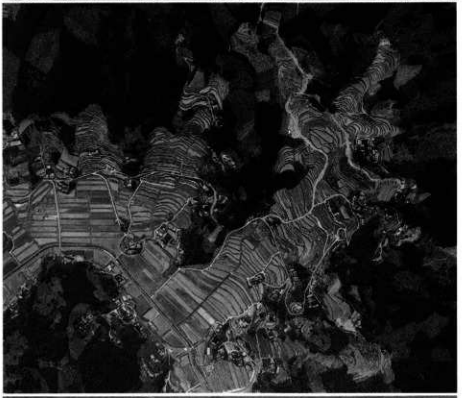
374

瀬戸　360

図版三〇　長谷の棚田の空中写真

棚田の垂直写真（1967年）

棚田の垂直写真（1998年）

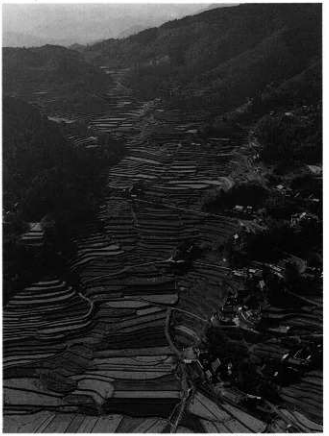


北から見た棚田（1988年）

図版三二　棚田の風景写真（下半の4枚は塩田豪一氏提供）

長谷地区遠景（1988年）

農道工事中の棚田（1998年）



中西の棚田（1988年）

宮の谷の棚田（西から）

溝谷の棚田（南東から）

中西の棚田（北から）

中西の棚田（北西から）

No. 45（下段）
とNo. 46（右上段）

No. 44（下段）
とNo. 45（右上段）

No. 46（下段左端）

No. 44（下段）とNo. 45（上段）

図版二三　長谷のガマの調査(2)

No. 46

No. 45の内部

No. 45

No. 44

図版三四　長谷のガマの調査(3)

No. 69（左端）とNo. 68（右端）

No. 69

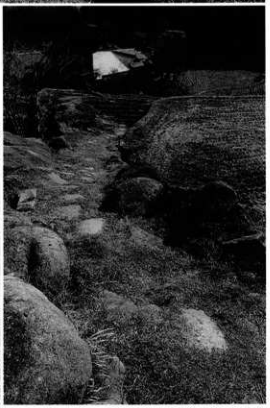
No. 67

No. 56

No. 57

図版三五　長谷のガマの調査と石敷道路

ガマの調査状況



長谷地区の石敷道路